タターガタ・アビダンマ

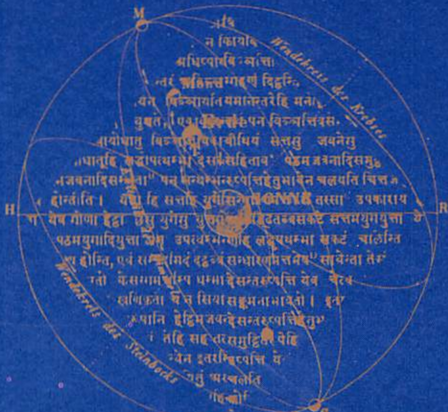
真理の御魂（みたま） 最聖 麻原彰晃尊師 著

Tathāgata Abhidhamma

真理勝者 絶対最勝の法則

第四誦品

真理のすべて



タターガタ・アビダンマ

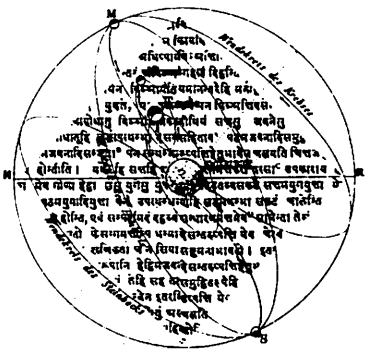
麻原彰晃 著

Tathāgata Abhidhamma

真理勝者 絶対最勝の法則

第四踊品

真理のすべて



序

『タターガタ・アビダンマ　第四誦品』は、『絶対の真理に関係づけられた経典』のすべての翻訳と、そしてわたしの解釈によって、皆さんに提供したいと考えました。

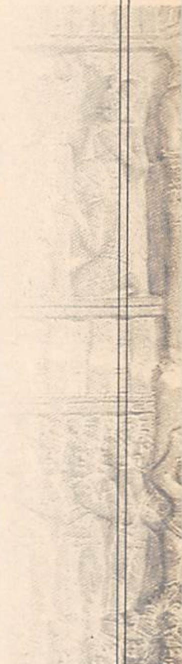
この『絶対の真理に関係づけられた経典』は、サキャ神賢の悟り後、第一声として発された「法則の車輪の発生」等、重要な解脱に関係する教えが説かれています。日本でも、解脱あるいは悟りという曖昧な言葉が氾濫していますが、その解脱や悟りの定義というものが、この『絶対の真理に関係づけられた経典』を皆さんが読むことによって明らかになることでしょう。

そして、なぜサキャ神賢の弟子たちが出家し、この現実の生活より出家の生活に価値を見いだしたか等について、この第四誦品を読むにつれて、皆さんの理解が少しずつ進んでくるに違いありません。そしてこれにより、第三誦品の在家による悟り、そして第四誦品の出家による悟り・解脱の教えが、皆さんに与える恩恵は多大なものと確信しています。

この教えをお説きになったサキャ神賢、そして、サキャ神賢をはじめとする、すべての真理勝者のグルであられるシヴァ大神に敬意を表して——。

麻原彰晃

一九九二年八月二十五日

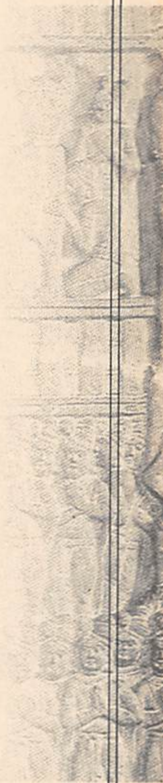


目次

タターガタ・アビダンマ
Tathāgata Abhidhamma
真理勝者 絶対最勝の法則

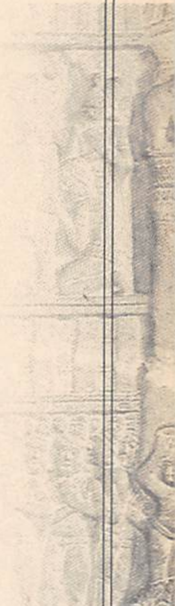
第四誦品
真理のすべて



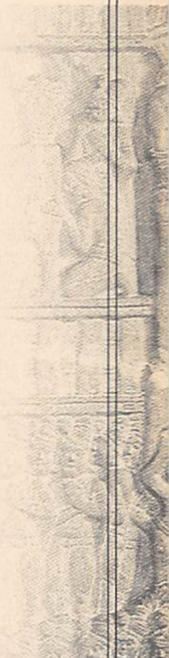


第二章　法則の車輪の発生品

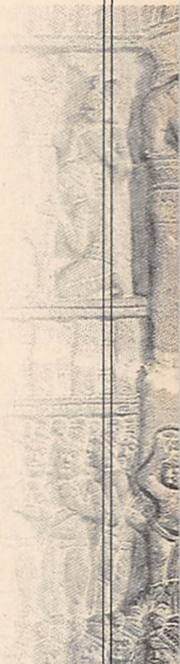




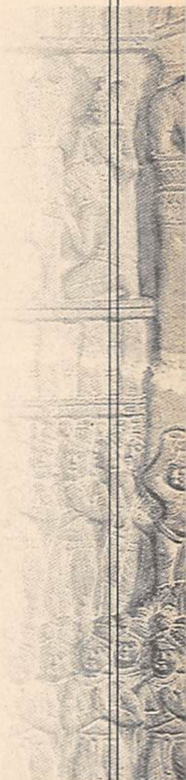










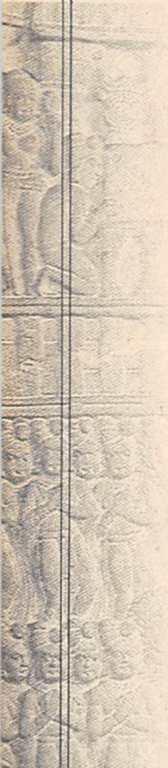


第四章　シッソノキの林品

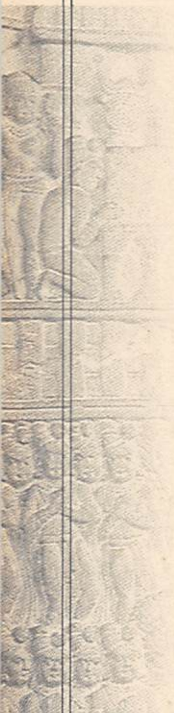


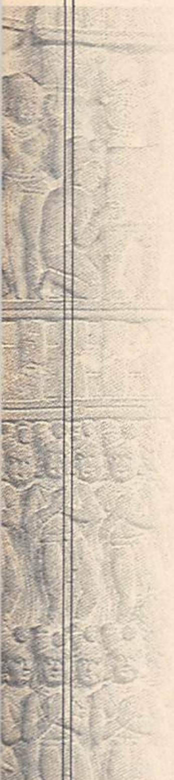




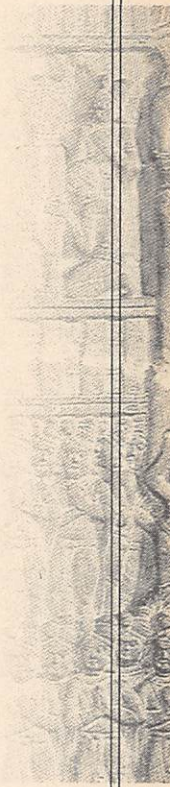












第九章　生の穀物復誦品



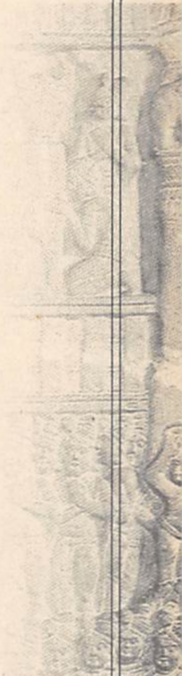


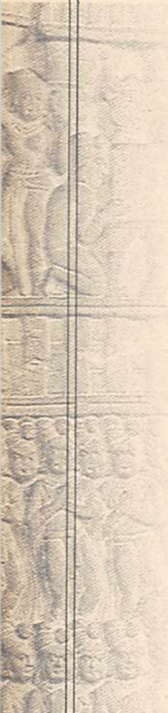


第十一章　五つの方向品









※『絶対の真理に関係づけられた経典（Sacca-Saṁyutta）』の翻訳は、Pali Text Society の『Saṁyutta Nikāya Vol.V』をテキストとした。なお、確実に誤植と思われるところは、（ ）内で正しい言葉を補うことにした。

絶対の真理に関係づけられた経典

Sacca-Saṃyutta

第一章

サマディ品

【一】第一　サマディ

一　このようにわたしは聞いた。

あるとき、世尊はサーヴァッティ（すべてのものがある）のジェータ（勝利者）林にあるアナータピンディカ（貧しい人に施し物を与える人）の大庭園にとどまっておられた。そこで実に、世尊は向煩悩滅尽多学男たちに呼びかけられた。

「向煩悩滅尽多学男たちよ」と。

「尊師よ。」

と、その向煩悩滅尽多学男たちは、世尊に承諾し申し上げた。世尊はこう演説なさった。

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、サマディを修習しなさい。向煩悩滅尽多学男たちよ、サマディに入った向煩悩滅尽多学男は、如実に認識し理解するのである。そして、何を如実に認識し理解するのであろうか。

三　『これは苦しみである』と認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如

実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解するのである。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、サマディを修習しなさい。向煩悩滅尽多学男たちよ、サマディに入った向煩悩滅尽多学男は、如実に認識し理解するのである。

向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである。」

◉サマディと絶対の真理

この内容は、サマディによってしか、本質的には、苦しみ、苦しみの生起、苦しみの滅尽、苦しみの滅尽に至る方法は理解できないということを表わしている。

そして、そのサマディに入るためには、今までの自分たちの見方ではなく、法則

にかなった見方により、苦しみ、苦しみの生起、苦しみの滅尽、苦しみの滅尽に至る方法をしっかりと記憶修習し、そしてそれを自分のものにする以外に方法はないんだということを説いていらっしゃる。それが、この経典『サマディ』の中の〝サマディ〟の意味合いなのである。

したがって、サマディに入るためには、苦しみ、苦しみの生起、苦しみの滅尽、苦しみの滅尽に至る方法を記憶修習する必要があるのである。

【二】第二　独居

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、独居において、専心し味わいなさい。向煩悩滅尽多学男たちよ、独居した向煩悩滅尽多学男は、如実に認識し理解するのである。そして、何を如実に認識し理解するのであろうか。

三『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、

『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解するのである。
四　向煩悩滅尽多学男たちよ、独居において、専心し味わいなさい。向煩悩滅尽多学男たちよ、独居した向煩悩滅尽多学男は、如実に認識し理解するのである。
向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉独居

わたしたちが、独居、あるいはリトリートといったように外界の情報から遮断されない限り、わたしたちは本質を見ることはできない――、逆に、独居によって外界と遮断されることによって、わたしたちはわたしたちの本質、例えば喜びと思っていたものが実際は苦しみであり、例えば苦しみと思っていたものが実際

は喜びである等の認識が成立するんだということを、この経典では説いていらっしゃるのである。

よって、日々情報の遮断をする必要があるのである。

【三】第三　善男子（一）

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く過去の遍歴で、正しく家庭生活の快適さを捨て、家なき状態になり、禁欲生活を送った善男子たちはどんな人もすべて、四つの聖なる絶対の真理に対して如実な明察の結果を得た。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、未来の遍歴で、正しく家庭生活の快適さを捨て、家なき状態になり、禁欲生活を送るであろう善男子たちはどんな人もすべて、四つの聖なる絶対の真理に対して如実な明察の結果を得るであろう。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、今、正しく家庭生活の快適さを捨て、家なき状態になり、禁欲生活を送る善男子たちはどんな人もすべて、四つの聖な

る絶対の真理に対して如実な明察の結果を得る。四つとは何であろうか。

五　苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く過去の遍歴で、正しく家庭生活の快適さを捨て、家なき状態になり、禁欲生活を送った善男子たちはどんな人もすべて、まさにこれら四つの聖なる絶対の真理に対して如実な明察の結果を得た。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、未来の遍歴で、正しく家庭生活の快適さを捨て、家なき状態になり、禁欲生活を送るであろう善男子たちはどんな人もすべて、まさにこれら四つの聖なる絶対の真理に対して如実な明察の結果を得るであろう。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、今、正しく家庭生活の快適さを捨て、家なき状態になり、禁欲生活を送る善男子たちはどんな人もすべて、四つの聖な

る絶対の真理に対して如実な明察の結果を得る。

向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉家庭生活の障礙

この経典には、家庭生活そのものが、四つの聖なる絶対の真理、――苦しみ、苦しみの生起、苦しみの滅尽、苦しみの滅尽に至る方法を悟ることにとっての障礙(しょうげ)であることが説かれている。

わたしたちにとって、もともと最も心をかき乱すもの、それは肉親の情であり、あるいは肉親と共に過ごす喜びであり、あるいは社会生活における権力や名声である。これらのものを、その条件の中に存在しながら、つまり家庭生活を行ない

ながら遮断することはなかなか難しい。

したがって出家――、つまりそのような縁を完全に絶ち切り、情報を遮断することにより、あるいは心をかき乱す条件を止滅することによってのみ、わたしたちは真の意味の情報からの解放が得られ、そしてそれによって、苦しみ、苦しみの生起、苦しみの滅尽、苦しみの滅尽に至る方法を体得することができると、この経典は説いているのである。

【四】 第四　善男子（二）

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く過去の遍歴で、正しく家庭生活の快適さを捨て、家なき状態になり、禁欲生活を送り、如実に明察した善男子たちはどんな人もすべて、四つの聖なる絶対の真理を如実に明察した。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、未来の遍歴で、正しく家庭生活の快適さを捨て、家なき状態になり、禁欲生活を送り、如実に明察するであろう善男

子たちはどんな人もすべて、四つの聖なる絶対の真理を如実に明察するであろう。
四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、今、正しく家庭生活の快適さを捨て、家なき状態になり、禁欲生活を送り、如実に明察している善男子たちはどんな人もすべて、四つの聖なる絶対の真理を如実に明察している。四つとは何であろうか。
五　苦しみの聖なる絶対の真理・苦しみの生起の聖なる絶対の真理・苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理・苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理である。
六　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く過去の遍歴で、正しく家庭生活の快適さを捨て、家なき状態になり、禁欲生活を送り、如実に明察した善男子たちはどんな人もすべて、これら四つの聖なる絶対の真理を如実に明察した。
向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、未来の遍歴で、正しく家庭生活の快適さを捨て、家なき状態になり、禁欲生活を送り、如実に明察するであろう善男子たちはどんな人もすべて、これら四つの聖なる絶対の真理を如実に明察するであ

ろう。
向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、今、正しく家庭生活の快適さを捨て、家なき状態になり、禁欲生活を送り、如実に明察している善男子たちはどんな人もすべて、これら四つの聖なる絶対の真理を如実に明察している。
向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉善男子

この経典は、一つ前の『善男子(一)』と意味合いとしてはほとんど変わらない。したがって、解説は少し視点を変えてしてみたいと思う。
一般に、出家は解脱への道であるとか、在家は天への道であると仏典は説く。

しかし、いくら出家をしたとしても、この四つの聖なる絶対の真理、——つまり苦しみ、苦しみの生起、苦しみの滅尽、苦しみの滅尽に至る方法について、しっかりとそれを体得しようと専心しなかったならば、決して四つの聖なる絶対の真理を体得することはできない。つまり、単に家から離れ、そして肉親の縁を切っただけでは、最高の悟り・解脱に到達することはできないのである。

そして、〝善男子〟と呼ばれる言葉、これは大乗仏典にも出てくるわけだが、それはもともと〝徳のある男性〟という意味である。では、なぜ徳のある男性なのだろうか。これは、女性の出家修行者と男性の出家修行者の行く世界が違うと仏典では説くからである。

そして、男性が前生の徳によって出家し、四つの聖なる絶対の真理に専心した場合、最高の境地であるニルヴァーナを体得できるのである。

【五】第五　出家修行者たちや祭司たち（一）

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く、過去の遍歴で、如実に現正覚（げんしょうかく）した出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人もすべて、四つの聖なる絶対の真理を如実に現正覚するであろう。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、未来の遍歴で、如実に現正覚するであろう出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人もすべて、四つの聖なる絶対の真理を如実に現正覚するであろう。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、今、如実に現正覚している出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人もすべて、四つの聖なる絶対の真理を如実に現正覚している。四つとは何であろうか。

　苦しみの聖なる絶対の真理・苦しみの生起の聖なる絶対の真理・苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理・苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理である。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、過去の遍歴で、如実に現正覚した出

家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人もすべて、これら四つの聖なる絶対の真理を如実に現正覚するであろう。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、未来の遍歴で、如実に現正覚するであろう出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人もすべて、これら四つの聖なる絶対の真理を如実に現正覚するであろう。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、今、如実に現正覚している出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人もすべて、これら四つの聖なる絶対の真理を如実に現正覚している。

向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉現正覚と四つの聖なる絶対の真理

この経典は、現正覚と四つの聖なる絶対の真理の関係を説いている。

まず、四つの聖なる絶対の真理を完全に体得するならば、現正覚、――つまり生きながらにして正しい覚醒、悟りに到達することができるとサキャ神賢は説いていらっしゃる。しかし、それはそのはずで、なぜならば、わたしたちは苦しみを楽しみだと錯覚し、あるいは悲痛を喜びだと錯覚し、そのような錯覚によりわたしたちは混沌（こんとん）とした意識状態を形成しているからである。

したがって、そのような意識状態から解放するための教え、つまり四つの聖なる絶対の真理を体得したならば、わたしたちは即座にこの現実の世界において正しい覚醒へ至ることができるのである。言い方を換えれば、この四つの聖なる絶対の真理なしに、正しい悟り、覚醒へ到達することはできないのだということを読者諸氏は認識するべきである。

【六】 第六　出家修行者たちや祭司たち（二）

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く、過去の遍歴で、如実に現正覚したことを説明した出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人もすべて、四つの聖なる絶対の真理を如実に現正覚したことを説明した。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、未来の遍歴で、如実に現正覚したことを説明するであろう出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人もすべて、四つの聖なる絶対の真理を如実に現正覚したことを説明するであろう。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く、今、如実に現正覚したことを説明している出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人もすべて、四つの聖なる絶対の真理を如実に現正覚したことを説明している。四つとは何であろうか。

苦しみの聖なる絶対の真理・苦しみの生起の聖なる絶対の真理・苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理・苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理である。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、過去の遍歴で、如実に現正覚したこ

とを説明した出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人もすべて、これら四つの聖なる絶対の真理を如実に現正覚したことを説明した。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、未来の遍歴で、如実に現正覚したことを説明するであろう出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人もすべて、これら四つの聖なる絶対の真理を如実に現正覚したことを説明するであろう。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、今、如実に現正覚したことを説明している出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人もすべて、これら四つの聖なる絶対の真理を如実に現正覚したことを説明している。

向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉空の体現

この経典は、『出家修行者たちや祭司たち（一）』の経典とほとんど意味合いが同じであるから、少しポイントを変えて解説をしたいと思う。

もともと悟りというものは、空を体現すること、そして心の透明さを体現することであるといわれている。特に北伝仏教においては、ヒナヤーナの悟り、マハーヤーナの悟り、タントラ・ヴァジラヤーナの悟りの三つの段階を規定している。しかし、南伝においては一つである。そして、経典を分析すると、南伝の教えはこの三つを総合していると見るべきである。したがって、本質的には南伝も北伝もないというのがわたしの見解である。

◉現正覚

ところで、この寂静であり、空であり、クリアな状態である悟りの状態とは、どのような状態であろうか。これはまさに、苦しみ、あるいは喜び、楽、あるい

は不楽といったいろいろな経験の要素が完全に止滅し、そして、本質的に空そのもの、空間そのもの、意識の広がりそのものの状態になったとき、〝現正覚〟という言葉が現出してくるのである。

つまり、この状態のときは、いかなる現象においても正しく心に映し出し、それによって、わたしたちは対象を正しく認識することができる。そして、正しく認識することができるがゆえに、わたしたちはその本質を見抜き、それによって苦しみ、苦しみの生起、苦しみの滅尽、苦しみの滅尽に至る方法を理解し、そして体現することができるのである。

したがって、本質的にクリアであり、本質的に空であり、本質的に寂静である状態、つまりわたしはこれを真我独存（しんがどくぞん）と呼んでいるわけだが、その状態に到達しない限り、正しく現正覚したとはいえないのである。

【七】 第七　種々の熟考

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、種々の悪不善の熟考を熟考してはならない。つまり、感覚の喜びの対象の熟考を、害心の熟考を、残酷の熟考をである。これはどうしてか。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、これらの熟考は利益を伴わず、神聖行(しんせいぎょう)の最初ではなく、現世否定(げんせひてい)・離愛著(りあいじゃく)・滅尽・臨寂静(りんじゃくせい)・証智(しょうち)・正覚(しょうかく)・煩悩破壊(ぼんのうはかい)に至らしめることはないのである」と。

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、そして実に、君たちは熟考しつつ、『これは苦しみである』と熟考しなさい。『これは苦しみの生起である』と熟考しなさい。『これは苦しみの滅尽である』と熟考しなさい。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と熟考しなさい。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、これらの熟考は利益を伴い、これらは神聖行であり、これらは神聖行の最初であり、これらは現世否定・離愛著・滅尽・臨寂静・

証智・正覚・煩悩破壊に至らしめるのである。
向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉神聖行である熟考

この経典は、わたしたちに大きな示唆を与えてくれる。
わたしたちは、日々の生活において、害心を修習したり、あるいは残酷を修習したり、あるいは感覚の喜びの対象を修習したりする。そして、この記憶の繰り返し、イコール熟考は、わたしたちに因を生じさせ、そしてそれによって経験を積ませる。その経験はまた次の因となり、それが雪だるまのように大きくなり、そして輪廻転生が決定される。

しかし、これらの要素がもともとは苦しみであり、苦しみの生起であり、そして苦しみの滅尽であり、苦しみの滅尽に至る方法であるということが認識でき、そして、それをしっかりと記憶修習するならば、これらの修習は、わたしたちに大いなる安らぎを含めた利益を与えてくれる。そして、それと同時に神聖行、つまり神聖世界へ至る道がスタートし、そしてその実践こそが神聖行であるとこの経典は説いている。

したがって、わたしたちが、残酷、害心、あるいは感覚の喜びの対象に対する記憶修習を捨てるならば、わたしたちは必ず現正覚、——この世において正しい悟りに到達することができるのである。

◉現正覚のプロセス

また、そのプロセスとしては、現世否定、離愛著、滅尽、この滅尽の段階で寂静に臨むことができるようになり、証智、正覚、煩悩破壊、つまりニルヴァーナ

へ至る道であると説くのである。
現世否定、離愛著、滅尽、寂静、証智、正覚、煩悩破壊の言葉の説明は、『タターガタ・アビダンマ　第二誦品』を参照していただきたい。

【八】　第八　思念

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、悪不善の思念を思念してはならない。『世界は不滅である』と、あるいは『世界は滅亡である』と。『世界は有限の期間である』と、あるいは『世界は無限の期間である』と。『それは霊魂であり、それは肉体である』と、あるいは『霊魂は別であり、肉体は別である』と。『真理勝者は死後存在する』と、あるいは『真理勝者は死後存在しない』と、あるいは『真理勝者は死後存在し、そして存在しない』と、あるいは『真理勝者は死後存在することもなく、存在しないこともない』と。これはどうしてか。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、この思念は利益を伴わず、神聖行の最初ではなく、

現世否定・離愛著・滅尽・臨寂静・証智・正覚・煩悩破壊に至らしめることはないのである。

四 向煩悩滅尽多学男たちよ、そして実に、君たちは思念しつつ、『これは苦しみである』と思念しなさい。『これは苦しみの生起である』と思念しなさい。『これは苦しみの滅尽である』と思念しなさい。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と思念しなさい。これはどうしてか。

五 向煩悩滅尽多学男たちよ、この思念は利益を伴い、これは神聖行の最初であり、これは現世否定・離愛著・滅尽・臨寂静・証智・正覚・煩悩破壊に至らしめるのである。

向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉神聖行である思念

この経典は、わたしたちに多くの示唆を与えてくれる。

わたしたちが神聖行、つまり真我独存位に到達するためには、三界の止滅――三界とは愛欲界（あいよくかい）、形状界（けいじょうかい）、非形状界（ひけいじょうかい）を表わすわけだが――、これと同時に、五つのとらわれの集積、――つまり肉体、感覚、表象、経験の構成、識別、これらを完全に止滅することにポイントが置かれる。したがって、四つの聖なる絶対の真理の記憶修習は、これらの五つのとらわれの集積を止滅する修行であるということができる。

しかし、例えばこの項に出てきているような世界の有限無限説や、あるいは霊魂に対する思索等は、有、つまり生存に対する思索であるがゆえに、智慧（ちえ）を発達させることはできるが、止滅には至らないのである。

したがって、サキャ神賢は、死ぬまでの時期がわからないわたしたちにとって何をなさなければならないのか――、それは当然、四つの聖なる絶対の真理の記

憶修習、記憶実践であると説いていらっしゃるのである。

【九】第九　論争の

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、論争の話を主張してはならない。

『あなたはこの法則と修行を認識していないが、わたしはこの法則と修行を認識している。どういう訳で、あなたはこの法則と修行を認識するつもりであろうか。あなたは誤謬に従っており、わたしは正しく従っている。前もって発言すべきものを後に言い、後に発言すべきものを前もって言った。わたしの言行は一致しており、あなたの言行は一致していない。あなたによって慣習は改変された。あなたの教義は論破された。教義の履行のために、動き回って生活しなさい。あなたはたしなめられた。もし結果として生じるならば、否定しなさい』と。これはどうしてか。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、この話は利益を伴わず、神聖行の最初ではなく、現世否定・離愛著・滅尽・臨寂静・証智・正覚・煩悩破壊に至らしめることはな

いのである。
四　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして実に、君たちは主張しつつ、『これは苦しみである』と主張しなさい。『これは苦しみの生起である』と主張しなさい。『これは苦しみの滅尽である』と主張しなさい。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と主張しなさい。これはどうしてか。
五　向煩悩滅尽多学男たちよ、というのは、この話は利益を伴い、これは神聖行の最初であり、これは現世否定・離愛著・滅尽・臨寂静・証智・正覚・煩悩破壊に至らしめるからである。
　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉論争に対する戒め

この経典の内容は、論争を戒めたものである。では、なぜ論争を戒めるのか。それは、もともと論争というものが外側に属するものであり、内側の五つのとらわれの集積を止滅するものではないからである。

例えば、言行が一致していようが一致していまいが、他人のことはどうでもいいのである。つまり、自己の解脱を求める者は、自分自身の五つのとらわれの集積を捨断し、そして煩悩破壊に至らしめるべきであって、他の人のことはどうでもいいのである。

もちろん、縁深き魂に対して四無量心を持って救済に当たる——、これは必要なことである。しかし、本来はこれは成就を成してから目指されるべきものであり、達成する前に外側に意識が向かうということは、修行上最も戒むべき内容なのである。

【一〇】第十　会話

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、様々な動物の会話を主張してはならない。

つまり、国王の会話、無法者の会話、大臣の会話、軍隊の会話、恐怖の会話、清潔な会話、食べ物の会話、飲み物の会話、衣服の会話、寝台の会話、花飾りの会話、香料の会話、親族の会話、乗り物の会話、村の会話、町の会話、市の会話、地方の会話、女性の会話、男性の会話、蒸留酒の会話、道端の会話、かめの場所での会話、以前の低級霊の会話、雑多な会話、世界の物語を語ること、海の物語を語ること、このような生存非生存の会話である。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、この会話は利益を伴わず、神聖行の最初ではなく、現世否定・離愛著・滅尽・臨寂静・証智・正覚・煩悩破壊に至らしめることはないのである。これはどうしてか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして実に、君たちは主張しつつ、『これは苦しみである』と主張しなさい。『これは苦しみの生起である』と主張しなさい。『こ

れは苦しみの滅尽である』と主張しなさい。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と主張しなさい。これはどうしてか。
五　向煩悩滅尽多学男たちよ、この会話は利益を伴い、これは神聖行の最初であり、これは現世否定・離愛著・滅尽・臨寂静・証智・正覚・煩悩破壊に至らしめるのである。
向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉現世的会話に対する戒め

わたしたちが修行者として修行を始める場合、わたしたちがなしてはならない会話がある。それは現世的会話である。

では、なぜ現世的会話をなしてはならないのであろうか。それは無智と関係があるからである。つまり、有限のものにいくら時間を費やしたとしても、例えば戦争の会話や、あるいは権力の会話等に時間を費やしたとして、それを保有する時間というものは死ぬまでである。

しかし、わたしたちが五つのとらわれの集積に対して、しっかりと瞑想し、実践し、そしてそれを乗り越えることができるならば、わたしたちは生死という枠組みを超え、そして煩悩破壊の世界において自在に生きることができるのである。

したがって、サキャ神賢は、現世的会話をなしてはならないと言っていらっしゃるのである。

第二章

法則の車輪の発生品

【一一】第一　真理勝者によって演説された（一）

一　このようにわたしは聞いた。

あるとき、世尊はバーラーナシー（剣の城壁）のイシパタナ・ミガダーヤ（尊い人が降りた鹿の公園）にとどまっておられた。

二　そこで実に、世尊は五人で集団をなしている向煩悩滅尽多学男たちに呼びかけられた。

「向煩悩滅尽多学男たちよ、わたしと共にいる出家者は二つの極端な状態に依存してはならない。二つとは何であろうか。

三　劣って、ありふれた普通の人のようであり、邪なることであり、不利益を被ることである、この種々の感覚の喜びの対象において、愛欲における豪華な生活をすることと、苦しみであり、邪なることであり、不利益を被ることである、この自分自身の疲労の専念とである。

向煩悩滅尽多学男たちよ、真理勝者はこれら双方の極端な状態を批判すること

なく、眼を引き起こし、精通を引き起こし、臨寂静・証智・正覚・煩悩破壊に至らしめる中間の方法を現正覚したのである。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、真理勝者が現正覚した、眼を引き起こし、精通を引き起こし、臨寂静・証智・正覚・煩悩破壊に至らしめる、その中間の方法とは何であろうか。これはまさに聖なる八段階の道である。つまり、正見解・正思惟・正語・正行為・正生活・正奮闘・正記憶修習・正サマディである。

　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれが真理勝者が現正覚した、眼を引き起こし、精通を引き起こし、臨寂静・証智・正覚・煩悩破壊に至らしめる、その中間の方法である。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、その場合においては、これが苦しみの聖なる絶対の真理である。出生は同様に苦しみであり、老いは同様に苦しみであり、疾患は同様に苦しみであり、死は同様に苦しみであり、種々の不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みは同様に苦しみである。敵意の人たちとのつきあいは苦しみで

あり、親愛な人たちとの別れは苦しみである。希望するものを得ないことは同様に苦しみである。要するに、五つのとらわれの集積は同様に苦しみである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、その場合においては、これが苦しみの生起の聖なる絶対の真理である。それは、この再生に導き、喜悦であり、愛著につながれ、あれやこれやで喜びを見いだす渇愛である。つまり、愛欲渇愛・生存渇愛・離生存渇愛である。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、その場合においては、これが苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理である。それは、まさにその渇愛に対する離愛著による全部の滅尽であり、放棄であり、拒絶であり、解脱であり、欲望のないことである。

八　向煩悩滅尽多学男たちよ、その場合においては、これが苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理である。これはまさに聖なる八段階の道である。つまり、正見解・正思惟・正語・正行為・正生活・正奮闘・正記憶修習・正サマディである。

九　向煩悩滅尽多学男たちよ、『これは苦しみの聖なる絶対の真理である』と、わたしには、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

向煩悩滅尽多学男たちよ、『その場合においては、この苦しみの聖なる絶対の真理を理解できる』と、わたしには、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

向煩悩滅尽多学男たちよ、『理解した』と、わたしには、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

一〇　向煩悩滅尽多学男たちよ、『これは苦しみの生起の聖なる絶対の真理である』と、わたしには、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

向煩悩滅尽多学男たちよ、『その場合においては、この苦しみの生起の聖なる

絶対の真理を捨断できる』と、わたしには、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

向煩悩滅尽多学男たちよ、『捨断した』と、わたしには、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

二 向煩悩滅尽多学男たちよ、『これは苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理である』と、わたしには、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

向煩悩滅尽多学男たちよ、『その場合においては、この苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理を現証できる』と、わたしには、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

向煩悩滅尽多学男たちよ、『現証した』と、わたしには、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、『これは苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理である』と、わたしには、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

向煩悩滅尽多学男たちよ、『その場合においては、この苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理を修習できる』と、わたしには、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

向煩悩滅尽多学男たちよ、『修習した』と、わたしには、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

二三　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、これら四つの聖なる絶対の真理に対するわたしの三つの連続した十二の状態の如実精通見解が、このように正しく清浄でなかった限りは、向煩悩滅尽多学男たちよ、まさにその場合には、わたしは、愛欲神と共にあり、破滅天と共にあり、神聖天と共にある世界において、出家修行者や祭司と共にあり、愛欲神や人々と共にある弟子において、無上の最上正覚を現正覚したと公言しなかった。

二四　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして実に、これら四つの聖なる絶対の真理に対するわたしの三つの連続した十二の状態の如実精通見解が、このように正しく清浄になったときから、向煩悩滅尽多学男たちよ、それでわたしは、愛欲神と共にあり、破滅天と共にあり、神聖天と共にある世界において、出家修行者や祭司と共にあり、愛欲神や人々と共にある弟子において、無上の最上正覚を現正覚したと公言した。したがって、わたしには精通と見解が生じたのである。

『わたしの心の離解脱は不変であり、これは最後に残った生であって、今再び生

存することがあることはない』と。」

一五　世尊はこれを演説なさった。大喜びした五人で集団をなしている向煩悩滅尽多学男たちは、世尊のお説きになったことに喜びを見いだした。

そしてしたがって、この回答が話されているとき、聖者コンダンニャ（他人に熱中している人）には、塵を離れ垢を離れた法則を理解する眼が生じた。

「生起の法則であることは何でも、すべて滅尽の法則である」と。

一六　また、このように世尊が法則の車輪を発生なさったとき、地上愛欲神天たちは声を口に出した。

「世尊はバーラーナシーのイシパタナ・ミガダーヤにおいて、出家修行者や祭司や愛欲神や破滅天や神聖天や世界の中のだれによっても撃退されない、この無上の法則の車輪を発生なさった」と。

一七　地上愛欲神天たちの声を聞いて、四大王愛欲神天たちは声を口に出した。

「世尊はバーラーナシーのイシパタナ・ミガダーヤにおいて、出家修行者や祭司

や愛欲神や破滅天や神聖天や世界の中のだれによっても撃退されない、この無上の法則の車輪を発生なさった」と。

一八　四大王愛欲神天たちの声を聞いて、三十三愛欲神天（さんじゅうさんあいよくしんてん）たちは声を口に出した。

「世尊はバーラーナシーのイシパタナ・ミガダーヤにおいて、出家修行者や祭司や愛欲神や破滅天や神聖天や世界の中のだれによっても撃退されない、この無上の法則の車輪を発生なさった」と。

三十三愛欲神天たちの声を聞いて、支配流転双生児愛欲神天（しはいるてんそうせいじあいよくしんてん）たちは声を口に出した。

「世尊はバーラーナシーのイシパタナ・ミガダーヤにおいて、出家修行者や祭司や愛欲神や破滅天や神聖天や世界の中のだれによっても撃退されない、この無上の法則の車輪を発生なさった」と。

支配流転双生児愛欲神天たちの声を聞いて、除冷淡愛欲神天（じょれいたんあいよくしんてん）たちは声を口に出した。

「世尊はバーラーナシーのイシパタナ・ミガダーヤにおいて、出家修行者や祭司や愛欲神や破滅天や神聖天や世界の中のだれによっても撃退されない、この無上の法則の車輪を発生なさった」と。

除冷淡愛欲神天たちの声を聞いて、創造満足愛欲神天たちは声を口に出した。

「世尊はバーラーナシーのイシパタナ・ミガダーヤにおいて、出家修行者や祭司や愛欲神や破滅天や神聖天や世界の中のだれによっても撃退されない、この無上の法則の車輪を発生なさった」と。

創造満足愛欲神天たちの声を聞いて、為他神以神通創造欲望満足従事愛欲神天たちは声を口に出した。

「世尊はバーラーナシーのイシパタナ・ミガダーヤにおいて、出家修行者や祭司や愛欲神や破滅天や神聖天や世界の中のだれによっても撃退されない、この無上の法則の車輪を発生なさった」と。

為他神以神通創造欲望満足従事愛欲神天たちの声を聞いて、神聖衆愛欲神天た

ちは声を口に出した。
「世尊はバーラーナシーのイシパタナ・ミガダーヤにおいて、出家修行者や祭司や愛欲神や破滅天や神聖天や世界の中のだれによっても撃退されない、この無上の法則の車輪を発生なさった」と。
一九　このように確かに、その刹那、その瞬間、その瞬く間に、神聖天の世界まで声は昇った。そして、この一万の世界の要素は揺れ、震動し、激しくぐらつき、そして、無量で巨大な光明が、愛欲神たちの愛欲神の威神力を超越して世界に生じたのである。
二〇　直ちに、世尊は狂喜句を唱えられた。
「本当に、コンダンニャが認識した。本当に、コンダンニャが認識した」と。
このように確かに、聖者コンダンニャには、このアンニャータ（認識した）・コンダンニャと、まさに名前があった、と。

◉中間の方法

ここで、少しわたしの独断と偏見に聞こえるかもしれないが、サキャ神賢の修行歴について考えてみたいと思う。

サキャ神賢の修行歴は、まず左道的な修行、これが第一に行なわれたと考えるべきである。これはサキャ神賢が、シッダッタ王子の時代、天女のように美しい多くの女性たちにかしずかれ、そこで徹底的に愛欲の貪りの味著（みじゃく）と過患（かかん）と出離（しゅつり）の経験、これをなさったとわたしは考えている。

そして次に、苦行時代である。この苦行時代はまさに疲労のみであり、解脱に至らなかった。そして、これをもって左と右の修行の終了と見るべきである。

そしてその後、サキャ神賢は、最も心を落ち着けて精神集中しやすい状況の修行に移行なさった。これが中間の方法（中道）の修行である。

したがって、左の批判、右の批判というものは、もともと愛欲の本質を理解し、苦行の本質を理解し経験なさったサキャ神賢だからこそできたことであると見る

べきである。

では次に、この中間の方法の修行とは何か。これは先程も述べたとおり、できるだけ平静な心を培い、そして瞑想に適した環境づくりを行ない、その瞑想に適した環境づくりにおいて自己の人生について考え、苦しみ、苦しみの生起、苦しみの滅尽、苦しみの滅尽に至る方法について、それを理解し実践するということである。

◉眼・精通

では、この中間の方法の状態における教えの実践は、わたしたちに何を与えてくれるのか。

それは、現象に対する正しい見方、これがまず第一に与えられる。次に、その見方によって、法則の概念的なものをわたしたちは理解することができる。これが精通である。

◉臨寂静・証智・正覚・煩悩破壊

この精通によって、わたしたちは寂静の状態に臨むことができる。そして、その寂静の状態によってサマディへと移行するわけである。

この臨寂静によって、わたしたちはサマディへと至り、それによって内側の体験、つまり正しい智慧をこの世において経験する。つまり証智の段階へと移行する。

そして、その証智はわたしたちに正しい覚醒、つまり現象を直観的かつ瞬間的に認識する正しい覚醒を与えてくれるのである。

そして、この正しい覚醒は、わたしたちが喜びであると思っていたもの、わたしたちが愛著の対象であると思っていたものが、実際は苦しみであることをわたしたちに納得させる。それによって、わたしたちは煩悩破壊がなされるのである。

これがサキャ神賢がお説きになった初転法輪(しょてんぼうりん)――、「法則の車輪の発生」の概要である。

◉苦しみの聖なる絶対の真理

それでは、苦しみの聖なる絶対の真理とは何か。

それは、出生、老い、疾患、死、種々の不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩み、敵意の人たちとのつきあい、親愛な人たちとの別れ、希望するものを得ないこと、そして五つのとらわれの集積である。これをサキャ神賢は、苦しみの定義としていらっしゃるのである。

◉苦しみの生起の聖なる絶対の真理

次は、苦しみの生起の聖なる絶対の真理である。

それは、この再生に導き、喜悦であり、愛著につながれ、あれやこれやで喜びを見いだす渇愛、つまり、愛欲渇愛・生存渇愛・離生存渇愛と説いていらっしゃる。

ここでは、愛著そのものが無常であることをポイントとしている。つまり、こ

れが無常でないとするならば、別にきずなにつながれてその愛著の対象を貪り続けることが苦しみではないわけだが、しかしこれらのすべては無常、必ず終わりの来るものであるということが前提となっているから、結果的には苦しみなのである。

◉苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理

次は、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理である。

それは、その渇愛に対する離愛著による全部の滅尽であり、放棄であり、拒絶であり、解脱であり、欲望のないことなのである。

◉苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理

そして、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理であるが、これは聖なる八段階の道ということができる。それについて説明しよう。

◉正見解

この正しい見解というのは、四つの聖なる絶対の真理に基づいた見解のことである。つまり、この世は苦しみである。苦しみは必ず生起する。そして、それは滅尽することができ、その滅尽する方法がある。

つまり、諸現象は無常である、よってそれは苦しみなのだという煩悩破壊の見解、それが正見解である。

◉正思惟

次に、正見解が根づいた段階で、解放、解脱に対する瞑想、——十二の条件生起の段階（『タターガタ・アビダンマ 第一誦品』参照）の瞑想が始まる。そして、心における害心、あるいは行為における残酷さ等を瞑想する。これが正思惟である。

◉正語

そして、嘘・軽薄語・悪口・中傷という四つの口のカルマを離れ、真実を語り、必要のない言葉を語らず、四無量心のこもった優しく綺麗な言葉を語る。これが正語である。

◉正行為

そして、行為において、殺生を離れ、与えられないものを強奪することを離れ、神聖行に赴かないことを離れる。つまり、殺生（せっしょう）、偸盗（ちゅうとう）、邪淫（じゃいん）の捨断をする。これを実践することにより、生き物を慈しむ優しい態度、そして人にものを施す優しい態度、そして、堂々と生きるための邪淫の捨断といった行為を行なう。これが正行為ということになる。

◉正生活

次は、正生活である。この正しい生活とは何かというと、これは日々七つの覚醒段階の実践を行なうことである。つまり、ひたすら真理のデータを入れ、そしてニルヴァーナに向かってのベクトルを向けるということである。

◉正奮闘

そして、今なしている善業を増大し、未来における善業を願望し、今なしている悪業をシャットアウトし、未来において生じるかもしれない悪業の種をまかないように奮闘努力する。これが正奮闘である。

◉正記憶修習

これらの奮闘をなした後、一つのことを繰り返し繰り返し唱えて、それを記憶する。例えば、自分自身の身体、感覚、心、そして観念といった、あるいはいろ

いろな法則といったものに対して記憶修習する。これが正記憶修習である。

◉正サマディ

そして、記憶修習をもとにサマディに入る。サマディに入った場合、今まで培ってきた心のリラックス、そして集中をもとに記憶修習したものによって、自己の煩悩を見つけ、それを破壊していく。これが正サマディである。

◉三つの連続した十二の状態

では次に、何をどのようにしたらわたしたちは解脱でき、悟ることができるのか。これが、三つの連続した十二の状態である。では、三つの連続した十二の状態とは何であろうか。

◉苦しみの理解

まず第一番目には、苦しみの存在そのものを知ることである。これが次の段階で、理解できるような段階へと到達する。そして、理解できる段階へ到達したならば、次はそれを完全に理解してしまう。

つまり、この「理解」は、別の言い方をするならば、まさに証智の段階。よって、これは「証智する」――まず苦しみの存在、苦しみを証智できる、そして証智したと置き換えることが当然できるであろう。そしてこれは、その苦しみに対する正しい見方の確定、精通の確定、そして智慧の確定、智慧による神秘力の確定、そして光の発生ということになるのである。

◉苦しみの生起の捨断

次に、苦しみの生起の段階である。この苦しみの生起の段階は、捨断の段階ということができる。つまり、苦しみをいかに引き起こさないか、それを止めてし

まうかということである。

これについても同じように、まず苦しみの生起そのものが存在するということを知り、そして次の段階で、その捨断ができることを知り、そしてそれを捨断してしまう、つまり「捨断した」と来るのである。そして、これも先程と同じように、正しい見方、そして精通、智慧、神秘力、そして光と移行するのである。

◉苦しみの滅尽の現証

次に、苦しみの滅尽の段階である。この苦しみの滅尽の段階は、まず苦しみの滅尽そのものが存在することを知り、そしてそれを現証、――つまりこの世の中に現わす、経験することができることを理解しなければならない。

そして、それが理解できた段階で、完全にそれを達成する、つまり「現証した」となるのである。そしてこれも同じように、それが達成されるならば、正しい見方、精通、智慧、神秘力、そして光の発生と至るのである。

◉苦しみの滅尽に至る方法の修習

同じように、苦しみの滅尽に至る方法については、これはその存在をまず知り、そしてそれを修習することができることをしっかりと理解し、そして「修習した」、つまり聖なる八段階の道を完全に確定した段階に至る。

そして、それを達成するならば、わたしたちはこの世において、まず正しい見方に立ち、精通が生じ、智慧が生じ、そして神秘力が生じ、光を発生することができるとサキャ神賢は説いていらっしゃる。

そして、この三つの連続した十二の状態をわたしたちが獲得するならば、わたしたちは解脱へと至るのである。

◉光

もともとわたしたちの真我というものは光り輝いている。しかし、それは多くの経験の構成、その他の五つのとらわれの集積によって曇った状態にある。しか

し、この曇った状態が、雲が取り払われたら太陽が燦然と輝くように、わたしたちの真我は輝きを発する。ここでいう〝光〟とは、その輝きを表わしているのである。

したがって、神秘力が生じ、つまり雲が薄くなり、そして雲が割れ、雲がなくなってくる段階で、徐々に徐々に光が増大し、そして完全なる神秘力、つまり雲の全くない状態になったときに光が発生するのである。

◉偉大なる法則

この後半部分については、その偉大なる達成が、この世界を構成しているいかなる要素においても、つまり神聖世界、あるいは破滅天の世界、あるいは愛欲神の世界であろうとも、また、この現実の人間世界における、例えば愛欲神のような力を持っている者、あるいは出家修行者や祭司、いかなる者であろうともこの法則を覆すことができず、これ以上の法則は存在しないとサキャ神賢は説いてい

らっしゃる。

そして、その偉大なる法則により、コンダンニャは悟りを得たのである。

次に、それによって、この地上愛欲神天から神聖衆愛欲神天までのすべての世界の神々が大喜びをし、そしてこの一万の世界が振動した。これが、この『真理勝者によって演説された』経典の内容である。

◉悟りと解脱

ところで、ここで一つ断わっておかなければならないことがある。それは、悟りを得た者は解脱したのかという問題である。

悟りを得た者は、確かに解脱をしたということができる。しかし、解脱の後に、——正確な言い方をするならば離解脱(りげだつ)の後に、離解脱精通見解(りげだつせいつうけんかい)へ到達するまでには時間がかかる。つまり当然、サキャ神賢の到達なさったそのポイントまでの距離は相当にあると考えるべきである。

◉真理を説くべき世界

「愛欲神と共にあり、破滅天と共にあり、神聖天と共にある世界において、出家修行者や祭司と共にあり、愛欲神や人々と共にある弟子において」という言葉について説明しておこう。

これは、真理を説かなければならない世界を表わす。それが、愛欲神、破滅天、神聖天の三つなのである。それと同時に、人間で真理に到達するのは、出家修行者、祭司、愛欲神や人々と共にある弟子ということになる。それにおいて、最上の悟りを得たというのである。

また、「愛欲神や人々と共にある弟子」という意味は、人間において神通を有し、天界と意識がつながっている弟子という意味である。

◉サキャ神賢の体現

「わたしの心の離解脱は不変であり、これは最後に残った生であって、今再び

生存することがあることはない」という言葉は、サキャ神賢の体現、――つまりこの世においてすでにこの三つの連続した十二の状態を完全に体現していらっしゃっていて、この滅尽の段階、滅尽に至る方法の段階を達成していらっしゃると見るべきである。

要するに、いっさいの束縛を捨断し切り離してしまっていらっしゃる、そして、聖なる八段階の道のすべてをもう達成し終わっていらっしゃって、その聖なる八段階の道を実践する必要がない状態ということである。つまり、聖なる八段階の道をまだ実践しているうちは終わっていないのである。

◉コンダンニャの悟り

「生起の法則であることは何でも、すべて滅尽の法則である」というのは、生じたものは必ず滅するということと同じで、つまり苦しみが生じた場合、その苦しみは当然滅尽することができるし、喜びも同じで、喜びが生じたら必ず滅尽さ

れるということである。
つまり、「生じたものは必ず滅するんだ、つまり滅尽の法則なんだ」ということを、コンダンニャはここで悟ったわけである。

【一二】第二　真理勝者によって演説された（二）

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、『これは苦しみの聖なる絶対の真理である』と、真理勝者方には、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。
向煩悩滅尽多学男たちよ、『その場合においては、この苦しみの聖なる絶対の真理を理解できる』と、真理勝者方には、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。
向煩悩滅尽多学男たちよ、『理解した』と、真理勝者方には、前世において伝

え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、『これは苦しみの生起の聖なる絶対の真理である』と、真理勝者方には、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

向煩悩滅尽多学男たちよ、『その場合においては、この苦しみの生起の聖なる絶対の真理を捨断できる』と、真理勝者方には、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

向煩悩滅尽多学男たちよ、『捨断した』と、真理勝者方には、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、『これは苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理である』

と、真理勝者方には、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

向煩悩滅尽多学男たちよ、『その場合においては、この苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理を現証できる』と、真理勝者方には、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

向煩悩滅尽多学男たちよ、『現証した』と、真理勝者方には、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、『これは苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理である』と、真理勝者方には、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

向煩悩滅尽多学男たちよ、『その場合においては、この苦しみの滅尽に至る方

法の聖なる絶対の真理を修習できる』と、真理勝者方には、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

向煩悩滅尽多学男たちよ、『修習した』と、真理勝者方には、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた」と。

◉真理勝者の条件

『真理勝者によって演説された(一二)』の内容は、真理勝者の条件、および「真理勝者とは」ということについて言及なされたものである。

つまり真理勝者とは何かというと、この三つの連続した十二の状態を達成した魂であるというわけである。しかもその条件は、だれかから教えられるのではなく、自分自身でそれをだれにも聞かないで達成した魂のことを指すとこの経典で

は言っている。

【一三】第三　集積

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら四つの聖なる絶対の真理がある。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理・苦しみの生起の聖なる絶対の真理・苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理・苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理である。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、苦しみの聖なる絶対の真理とは何であろうか。それには、五つのとらわれの集積と発言できる。つまり、形状‐容姿のとらわれの集積・感覚のとらわれの集積・表象のとらわれの集積・経験の構成のとらわれの集積・識別のとらわれの集積である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これが苦しみの聖なる絶対の真理といわれる。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、苦しみの生起の聖なる絶対の真理とは何

であろうか。それは、この再生に導き、喜悦であり、愛著につながれ、あれやこれやで喜びを見いだす渇愛である。つまり、愛欲渇愛・生存渇愛・離生存渇愛である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これが苦しみの生起の聖なる絶対の真理といわれる。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理とは何であろうか。それは、まさにその渇愛に対する離愛著による全部の滅尽であり、放棄であり、拒絶であり、解脱であり、欲望のないことである。向煩悩滅尽多学男たちよ、これが苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理といわれる。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理とは何であろうか。これはまさに聖なる八段階の道である。つまり、正見解・正思惟・正語・正行為・正生活・正奮闘・正記憶修習・正サマディである。向煩悩滅尽多学男たちよ、これが苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理といわれる。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に聖なる絶対の真理である。向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉専心

この経典は、まさに四つの聖なる絶対の真理とは何であるかということについてお説きになっていらっしゃる経典である。

そして、この四つの聖なる絶対の真理を実践するとは、それをしっかりとまず記憶し、認識し、そして理解し、捨断し、現証し、修習することを表わしているのだということをいっているわけである。そして、それに対して集中して生き続けること、これが「専心」という言葉で表現されているのである。

◉五つのとらわれの集積

『真理勝者によって演説された(二)』の経典で、「五つのとらわれの集積」の前に「要するに」といっているのは、その前に出てきている内容のすべては、その五つのとらわれの集積の中身だということである。

例えば、憎む者と一緒にいるのは苦しみであるとか、愛著する者と離別するのは苦しみであるといった、その五つのとらわれの集積の中身をまず説いておいて、要するにそれは五つのとらわれの集積なんだよというのである。つまり、次の経典では、その五つのとらわれの集積をいった場合は、何を意味するかというと、例えば、生まれるとか、死ぬとか、病むとか、あるいは愛する者と別れるとか、憎む者と一緒にいるということが入っているわけである。

具体的に説明しよう。まず肉体だが、この肉体というのは、生と死、あるいは老いを担当している。次に感覚だが、これは激痛とか、苦しみとか、そういうものを担当している。次に表象、イメージがあるが、これは愛する者と一緒にいた

いとか、あるいは憎む者と一緒にいたくないとかいうものを担当している。例えば、生まれて、死んで、また生まれる、これは経験の構成が担当している。それから、例えば、希望するものを得ないことというのは、希望というのが識別から出てくることから、識別が担当していることがわかる。

つまり、これらは五つのとらわれの集積の中身なのである。

【一四】第四　境

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら四つの聖なる絶対の真理がある。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理・苦しみの生起の聖なる絶対の真理・苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理・苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理である。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、苦しみの聖なる絶対の真理とは何であろうか。それには、六つの心の中の境と発言できる。六つとは何であろうか。眼境・

耳境・鼻境・舌境・身境・意識境である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これが苦しみの聖なる絶対の真理といわれる。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、苦しみの生起の聖なる絶対の真理とは何であろうか。それは、この再生に導き、喜悦であり、愛著につながれ、あれやこれやで喜びを見いだす渇愛である。つまり、愛欲渇愛・生存渇愛・離生存渇愛である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これが苦しみの生起の聖なる絶対の真理といわれる。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理とは何であろうか。それは、まさにその渇愛に対する離愛著による全部の滅尽であり、放棄であり、拒絶であり、解脱であり、欲望のないことである。向煩悩滅尽多学男たちよ、これが苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理といわれる。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理とは何であろうか。これはまさに聖なる八段階の道である。つまり、正見解・

正思惟・正語・正行為・正生活・正奮闘・正記憶修習・正サマディである。向煩悩滅尽多学男たちよ、これが苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理といわれる。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に四つの聖なる絶対の真理である。向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽であある』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉六つの心の中の境

これは、苦しみについて言い換えているだけである。そして、その苦しみについて言い換えている内容は、六境――、つまり、眼境から始まって意識境に至るこの六つの外界と接触し得る境(さかい)である。それが五つのとらわれの集積を形成する。

だから、仏教というのは、この五つのとらわれの集積を形成している眼境から意識境までを、完全に苦しみでない状態に変えてしまえば、苦しみは止滅するんだという教えなのである。そして、そのためにはどうしたらいいかというと、例えば、口、言葉の遣い方だとか、外界に対する眼の使い方だとか、あるいは耳の使い方だとかいうことを説いている。そして、それが何かというと、聖なる八段階の道だということを、この経典では言っているのである。

【一五】第五　記憶実践（一）

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、今、あなた方はわたしの指し示した四つの聖なる絶対の真理を記憶実践しなさい」と。

三　このようにおっしゃられたとき、ある向煩悩滅尽多学男は世尊にこう申し上げた。

「尊師よ、わたしは実に、世尊によって指し示された四つの聖なる絶対の真理を

記憶実践いたします」と。

「向煩悩滅尽多学男よ、さてどのように、あなたはわたしによって指し示された四つの聖なる絶対の真理を記憶実践するのだろうか」と。

四「尊師よ、実にわたしは、世尊によって指し示された苦しみの第一の聖なる絶対の真理を記憶実践いたします。

尊師よ、実にわたしは、世尊によって指し示された苦しみの生起の第二の聖なる絶対の真理を記憶実践いたします。

尊師よ、実にわたしは、世尊によって指し示された苦しみの滅尽の第三の聖なる絶対の真理を記憶実践いたします。

尊師よ、実にわたしは、世尊によって指し示された苦しみの滅尽に至る方法の第四の聖なる絶対の真理を記憶実践いたします。

尊師よ、このように、実にわたしは世尊によって指し示された四つの聖なる絶対の真理を記憶実践いたします」と。

五　「素晴らしいことだ、素晴らしいことだ、向煩悩滅尽多学男よ。素晴らしいことだ、向煩悩滅尽多学男よ、実にあなたはわたしによって指し示された四つの聖なる絶対の真理を記憶実践するのである。

向煩悩滅尽多学男よ、実にわたしによって苦しみの第一の聖なる絶対の真理が指し示されたが、同様にそれを記憶実践しなさい。

向煩悩滅尽多学男よ、実にわたしによって苦しみの生起の第二の聖なる絶対の真理が指し示されたが、同様にそれを記憶実践しなさい。

向煩悩滅尽多学男よ、実にわたしによって苦しみの滅尽の第三の聖なる絶対の真理が指し示されたが、同様にそれを記憶実践しなさい。

向煩悩滅尽多学男よ、実にわたしによって苦しみの滅尽に至る方法の第四の聖なる絶対の真理が指し示されたが、同様にそれを記憶実践しなさい。

六　向煩悩滅尽多学男よ、実にこのように、わたしによって指し示された四つの聖なる絶対の真理を記憶実践しなさい。

向煩悩滅尽多学男よ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉記憶実践

わたしたちはもともとけがれた魂である。これは疑えない。したがって、けがれた魂のけがれた記憶、あるいは習性をもとに、身の行ない、言葉、そして心の働きを絶えず展開していたのでは、わたしたちは同じ過ちを繰り返し、悪趣(あくしゅ)を流転することになるのである。

ところで、わたしたちがこの悪趣を流転するところから脱却するためには、どのようにしたらいいか。そのためには記憶実践が必要となる。

つまり、記憶実践とは何かというと、それは真理をまずしっかりと記憶し、そ

して何度も何度も繰り返し修習する。そして、その修習したものを土台として実践する。そこで、絶えず真理の教えにおける言葉や行動や、そして心の働きに違（たが）えないように行なっているかどうかをチェックしながら行なうのである。これが記憶実践である。

【一六】第六　記憶実践（二）

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、今、あなた方はわたしの指し示した四つの聖なる絶対の真理を記憶実践しなさい」と。

三　このようにおっしゃられたとき、ある向煩悩滅尽多学男は世尊にこう申し上げた。

「尊師よ、わたしは実に、世尊によって指し示された四つの聖なる絶対の真理を記憶実践いたします」と。

「向煩悩滅尽多学男よ、さてどのように、あなたはわたしによって指し示された

四つの聖なる絶対の真理を記憶実践するのだろうか」と。

四「尊師よ、実にわたしは、世尊によって指し示された苦しみの第一の聖なる絶対の真理を記憶実践いたします。尊師よ、というのは、出家修行者や、あるいは祭司が、『出家修行者ゴータマ（牛王）によって指し示されたこの苦しみの第一の聖なる絶対の真理はない。わたしはこの苦しみの第一の聖なる絶対の真理に拒絶反応を起こして、他の苦しみの第一の聖なる絶対の真理を示そう』と、このように断言することは何でも、この道理は存在しないからです。

五　尊師よ、実にわたしは、世尊によって指し示された苦しみの生起の第二の聖なる絶対の真理を記憶実践いたします。尊師よ、というのは、出家修行者や、あるいは祭司が、『出家修行者ゴータマによって指し示されたこの苦しみの生起の第二の聖なる絶対の真理はない。わたしはこの苦しみの生起の第二の聖なる絶対の真理に拒絶反応を起こして、他の苦しみの生起の第二の聖なる絶対の真理を示そう』と、このように断言することは何でも、この道理は存在しないからです。

六　尊師よ、実にわたしは、世尊によって指し示された苦しみの滅尽の第三の聖なる絶対の真理を記憶実践いたします。尊師よ、というのは、出家修行者や、あるいは祭司が、『出家修行者ゴータマによって指し示されたこの苦しみの滅尽の第三の聖なる絶対の真理はない。わたしはこの苦しみの滅尽の第三の聖なる絶対の真理に拒絶反応を起こして、他の苦しみの滅尽の第三の聖なる絶対の真理を示そう』と、このように断言することは何でも、この道理は存在しないからです。

七　尊師よ、実にわたしは、世尊によって指し示された苦しみの滅尽に至る方法の第四の聖なる絶対の真理を記憶実践いたします。尊師よ、というのは、出家修行者や、あるいは祭司が、『出家修行者ゴータマによって指し示されたこの苦しみの滅尽に至る方法の第四の聖なる絶対の真理はない。わたしはこの苦しみの滅尽に至る方法の第四の聖なる絶対の真理に拒絶反応を起こして、他の苦しみの滅尽に至る方法の第四の聖なる絶対の真理を示そう』と、このように断言することは何でも、この道理は存在しないからです。

八　尊師よ、このように、実にわたしは世尊によって指し示された四つの聖なる絶対の真理を記憶実践いたします」と。

九　「素晴らしいことだ、素晴らしいことだ、向煩悩滅尽多学男よ。素晴らしいことだ、向煩悩滅尽多学男よ、実にあなたはわたしによって指し示された四つの聖なる絶対の真理を記憶実践するのである。

向煩悩滅尽多学男よ、実にわたしによって苦しみの第一の聖なる絶対の真理が指し示されたが、同様にそれを記憶実践しなさい。向煩悩滅尽多学男よ、というのは、出家修行者や、あるいは祭司が、『出家修行者ゴータマによって指し示されたこの苦しみの第一の聖なる絶対の真理はない。わたしはこの苦しみの第一の聖なる絶対の真理に拒絶反応を起こして、他の苦しみの第一の聖なる絶対の真理を示そう』と、このように断言することは何でも、この道理は存在しないからだ。

向煩悩滅尽多学男よ、実にわたしによって苦しみの生起の第二の聖なる絶対の真理が指し示されたが、同様にそれを記憶実践しなさい。向煩悩滅尽多学男よ、

というのは、出家修行者や、あるいは祭司が、『出家修行者ゴータマによって指し示されたこの苦しみの生起の第二の聖なる絶対の真理はない。わたしはこの苦しみの生起の第二の聖なる絶対の真理に拒絶反応を起こして、他の苦しみの生起の第二の聖なる絶対の真理を示そう』と、このように断言することは何でも、この道理は存在しないからだ。

向煩悩滅尽多学男よ、実にわたしによって苦しみの滅尽の第三の聖なる絶対の真理が指し示されたが、同様にそれを記憶実践しなさい。向煩悩滅尽多学男よ、というのは、出家修行者や、あるいは祭司が、『出家修行者ゴータマによって指し示されたこの苦しみの滅尽の第三の聖なる絶対の真理はない。わたしはこの苦しみの滅尽の第三の聖なる絶対の真理に拒絶反応を起こして、他の苦しみの滅尽の第三の聖なる絶対の真理を示そう』と、このように断言することは何でも、この道理は存在しないからだ。

向煩悩滅尽多学男よ、実にわたしによって苦しみの滅尽に至る方法の第四の聖

なる絶対の真理が指し示されたが、同様にそれを記憶実践しなさい。向煩悩滅尽多学男よ、というのは、出家修行者や、あるいは祭司が、『出家修行者ゴータマによって指し示されたこの苦しみの滅尽に至る方法の第四の聖なる絶対の真理はない。わたしはこの苦しみの滅尽に至る方法の第四の聖なる絶対の真理に拒絶反応を起こして、他の苦しみの滅尽に至る方法の第四の聖なる絶対の真理を示そう』と、このように断言することは何でも、この道理は存在しないからだ。

九　向煩悩滅尽多学男よ、実にこのように、あなたはわたしによって指し示された四つの聖なる絶対の真理を記憶実践しなさい。

向煩悩滅尽多学男よ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉出家や修行の意義

この経典は、今までの経典と何ら変わりがないように思われるが、一つだけポイントがある。それは、出家の意義、あるいは修行の意義ということである。

まず、出家の意義、修行の意義とは何かというと、完全なるニルヴァーナに到達することである。ニルヴァーナとは、これはまさに煩悩破壊であり、煩悩破壊とは真我独存位である。そして、なぜ真我独存位へ到達しなければならないかというと、真我独存位こそが完全なる苦しみからの解放だからである。

よって、苦しみ、苦しみの生起、苦しみの滅尽、苦しみの滅尽に至る方法を、完璧に解き明かしたサキャ神賢の教え以上の教えがこの世に存在するはずはないと、この経典では言っているのである。

【一七】第七　非神秘力

二　直ちに、ある向煩悩滅尽多学男は、世尊の所に行った。行くと、世尊に敬礼して、そばに座った。

三　そばに座ったその向煩悩滅尽多学男は、実に世尊にこう申し上げた。「尊師よ、非神秘力、非神秘力と演説なさいますが、尊師よ、いったい非神秘力とは何であり、そして、どのくらいの範囲まで非神秘力に及ぶのでしょうか」と。

四「向煩悩滅尽多学男よ、実に苦しみにおける無精通、苦しみの生起における無精通、苦しみの滅尽における無精通、苦しみの滅尽に至る方法における無精通、向煩悩滅尽多学男よ、これが非神秘力といわれ、そして、それゆえに非神秘力に及ぶのである。

五　向煩悩滅尽多学男よ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきで

ある」と。

◉非神秘力

非神秘力とは何かについての定義である。これは、経験の構成に対する誤ったとらわれ、これを非神秘力と説いているのである。

では、なぜそれが生じるか。それは、苦しみ、苦しみの生起、苦しみの滅尽、苦しみの滅尽に至る方法に対して、正しい精通、つまり、正しい納得がなされていないがゆえに生じるのであり、そうしたとらわれを非神秘力と説いていらっしゃるのである。

【一八】第八　神秘力

二　直ちに、ある向煩悩滅尽多学男は、世尊の所に行った。行くと、世尊に敬礼して、そばに座った。

三　そばに座ったその向煩悩滅尽多学男は、実に世尊にこう申し上げた。「尊師よ、神秘力、神秘力と演説なさいますが、尊師よ、いったい神秘力とは何であり、そして、どのくらいの範囲まで神秘力に達するのでしょうか」と。

四「向煩悩滅尽多学男よ、実に苦しみにおける精通、苦しみの生起における精通、苦しみの滅尽における精通、苦しみの滅尽に至る方法における精通、向煩悩滅尽多学男よ、これが神秘力といわれ、そして、それゆえに神秘力に達するのである。

五　向煩悩滅尽多学男よ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉正しい精通

正しい精通が生じるならば、当然正しい実践が生じ、その結果として正しい離解脱が生じる。この経典では、それを説いているにすぎない。

【一九】第九　解明

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、『これは苦しみの聖なる絶対の真理である』と、わたしによって示された。そこでは、無量の色彩、無量の特徴、無量の解明がある。このように同様に、『これは苦しみの聖なる絶対の真理である』と。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、『これは苦しみの生起の聖なる絶対の真理である』と、わたしによって示された。そこでは、無量の色彩、無量の特徴、無量の解明がある。このように同様に、『これは苦しみの生起の聖なる絶対の真理である』と。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、『これは苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理である』と、わたしによって示された。そこでは、無量の色彩、無量の特徴、無量の解明が

ある。このように同様に、『これは苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理である』と。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、『これは苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理である』と、わたしによって示された。そこでは、無量の色彩、無量の特徴、無量の解明がある。このように同様に、『これは苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理である』と。

六　向煩悩滅尽多学男よ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉無量の色彩・特徴・解明

苦しみ、苦しみの生起、苦しみの滅尽、苦しみの滅尽に至る方法、これは原則的に分けると、『真理勝者によって演説された（一）』で解き明かしたような内容

となるわけだが、それを個々のケースに分けた場合、それは当然数えきれないほどのカテゴリーに分類することができる。

そして、その数えきれないほどのカテゴリーは、いろいろな色、あるいは光として表現され、そしてそれはいろいろな特徴として表現される。ここでいう「表現される」とは、具体的に神秘的な力を有した場合、それがそのように見えるということである。

そして、それは当然ケースバイケースによって、つまり多くの因に対して多くの果があるように、ケースバイケースによって結果が生じるわけだから、それに対しては無量の解明が存在するというふうに、この経典では言っているのである。

【三〇】第十　種々の真理

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら四つの真理があり、異ならない真理があり、不可避がある。四つとは何であろうか。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、『これは苦しみである』と、これは真理であり、これは異ならない真理であり、これは不可避である。
四　『これは苦しみの生起である』と、これは真理であり、これは異ならない真理であり、これは不可避である。
五　『これは苦しみの滅尽である』と、これは真理であり、これは異ならない真理であり、これは不可避である。
六　『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と、これは真理であり、これは異ならない真理であり、これは不可避である。
七　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら四つは真理であり、異ならない真理であり、不可避である。
　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心す

べきである」と。

◉異ならない、不可避である真理

苦しみ、苦しみの生起、苦しみの滅尽、苦しみの滅尽に至る方法は、真理であり、そしていかなる真理とも相矛盾する要素がなく、それと同時にわたしたちが避けることのできないものであると、この経典では説いている。

つまり別の言い方をすれば、真理とは何かといった場合、単純に真理とは真理であると答えるだけではなく、それはわたしたちが避けることのできない要素であり、いかなる角度から見たとしてもそれは矛盾しないものであると、この経典では説いているのである。

したがって、それを実践しない限り、わたしたちは真に幸福になれないということになる。なぜならば、この四つの真理の流れは、わたしたちの人生のすべて、わたしたちを構成しているもののすべて、わたしたちを支えているこの世界のすべてを説き明かしているからである。

第三章

コーティ村品

【三二】第一　ヴァッジ・神秘力（一）

一　このようにわたしは聞いた。
あるとき、世尊はヴァッジ（音を出す国）国のコーティ（端）村にとどまっておられた。
二　そこで実に、世尊は向煩悩滅尽多学男たちに、次のようにお説きになった。
「向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に目覚めることがなく、洞察がないゆえに、わたしそれのみならずそして君たちも、このようにこの大変長い間転生させられ生まれ変わらせられたのである。四つとは何であろうか。
三　向煩悩滅尽多学男たちよ、苦しみの聖なる絶対の真理に目覚めることがなく、洞察がないゆえに、わたしそれのみならずそして君たちも、このようにこの大変長い間転生させられ生まれ変わらせられた。
苦しみの生起の聖なる絶対の真理に目覚めることがなく、洞察がないゆえに、わたしそれのみならずそして君たちも、このように大変長い間転生させられ生ま

れ変わらせられた。

苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に目覚めることがなく、洞察がないゆえに、わたしそれのみならずそして君たちも、このように大変長い間転生させられ生まれ変わらせられた。

苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に目覚めることがなく、洞察がないゆえに、わたしそれのみならずそして君たちも、このように大変長い間転生させられ生まれ変わらせられた。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、その結果、苦しみの聖なる絶対の真理に目覚め洞察し、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に目覚め洞察し、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に目覚め洞察し、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に目覚め洞察した。したがって、生存渇愛が断滅され、生存へと復活させる要因が破壊され、今再び生存することがあることはない」と。

五　世尊はこれを演説なさった。これを演説した後、最上善逝(さいじょうぜんぜい)である尊師は、そ

してその上こう演説なさった。

「四つの聖なる絶対の真理を
如実に見ることがなく、
まさにそれぞれの生において、
大変長い間生まれ変わらせられた。
これらが見られたなら、
生存へと復活させる要因が根こそぎにされ、
苦しみの根本が断滅され、
今再び生存することがあることはない」と。

◉再生の捨断

この経典は、わたしたちが四つの聖なる絶対の真理を理解することによって、

再生を捨断できる、つまり真我独存に至れることを説いている。そして、それは三つのプロセスからなると説いている。つまり、まず生存渇愛の捨断、それによる次の生の要素の止滅、そしてそれによる流転の静止である。
　したがって結果的には、わたしたちがこの四つの聖なる絶対の真理を実践するならば、必ずや離解脱するのである。

【三二】第二　ヴァッジ・神秘力（二）

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く、『これは苦しみである』と如実に認識せず理解せず、『これは苦しみの生起である』と如実に認識せず理解せず、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識せず理解せず、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識せず理解することがない出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人も、向煩悩滅尽多学男たちよ、その出家修行者たちや、あるいは祭司たちは、わたしにあるいは出家修行者たちの中の出家修行者として崇拝さ

れ、あるいは祭司たちの中の祭司として崇拝されることはない。
そしてしたがって、その聖者たちは、出家修行者に対する尊敬があることの意義や、あるいは祭司に対する尊敬があることの意義を、この世界において、自ら証智し現証し達成してとどまることはないのである。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして実に、『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解する出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人も、向煩悩滅尽多学男たちよ、実にその出家修行者たちや、あるいは祭司たちは、わたしに出家修行者たちの中の出家修行者として崇拝され、それのみならずそして祭司たちの中の祭司として崇拝される。
そしてしたがって、この聖者たちは、出家修行者に対する尊敬があることの意義と祭司に対する尊敬があることの意義とを、この世界において、自ら証智し現

証し達成してとどまるのである」と。

四　世尊はこれを演説なさった。これを演説した後、最上善逝である尊師は、そしてその上こう演説なさった。

一「苦しみを、
およびび苦しみの起源を、
そしてすっかり苦しみの全部が、
打破される所を認識せず理解せず、

二　そして苦しみの臨寂静に至る、
その道に気づかない者たちは、
心の離解脱はあきらめられ、
および智慧の離解脱や、

終極を行なうことはあり得ず、
偽りなく出生と老いに達する。

三　そして、苦しみを、
および苦しみの起源を、
そしてすっかり苦しみの全部が、
打破される所を認識し理解し、

四　そして苦しみの臨寂静に至る、
その道を認識し理解する者たちは、
心の離解脱に恵まれ、
および智慧の離解脱や、
終極を行なうことはあり得、

出生と老いに達することはない」と。

◉教祖の条件

出家修行者や祭司たちの意義について、自ら証智し現証し達成してとどまるとある。つまり言い方を換えれば、宗教の教祖というものの条件、これを表わしているわけである。

それは何かというと、四つの聖なる絶対の真理を知って理解しているかどうかである。そして逆に、その四つの聖なる絶対の真理を理解している魂は、それは本当の意味での出家修行者であり、祭司であるということである。

◉離解脱に至る条件

詩句について説明しよう。

まず、苦しみの存在、それから苦しみの起源の存在についてだが、これは、何

をどのように行なえばその苦しみそのものが根こそぎになるのかという起源を知る必要があるわけである。その起源を理解することと、苦しみの滅尽、完全な苦しみの滅尽、これを理解しない出家修行者や祭司は、本当の意味での出家修行者や祭司ではなく、結局、老いや死に追い込まれるということを言っていらっしゃるのである。

そして逆に、苦しみ、苦しみの起源と、それからその苦しみの全部を滅尽する方法を知っていれば、老死が止滅する。これは結局、老死が止滅するということは、智慧の離解脱、心の離解脱、および終極である完全煩悩破壊が達成できるということである。

【三三】 第三　最上正覚者

一、二　サーヴァッティ。

「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら四つの聖なる絶対の真理がある。四つとは何

であろうか。

三　苦しみの聖なる絶対の真理・苦しみの生起の聖なる絶対の真理・苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理・苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理である。

向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に四つの聖なる絶対の真理である。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら四つの聖なる絶対の真理を如実に現正覚したことから、供養値魂（くようちこん）・最上正覚者（さいじょうしょうかくしゃ）であられる真理勝者といわれる。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉最上正覚者

最上正覚者とは何かというと、要するに、四つの聖なる絶対の真理を完全に体

得した魂である。それで、その四つの聖なる絶対の真理を体得するとどうなるかというと、真理によってすべてに打ち勝った真理勝者となる。そして、その真理勝者となること、イコール最上正覚者になるということなのである。

そのためには、現証と修習、これを繰り返し、現正覚――つまり、この現在において完全に正しく悟りに到達する。そして、最後には修習が全くいらない状態をつくるわけである。

【二四】第四　供養値魂

一　サーヴァッティ。

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く、過去の遍歴で、如実に現正覚した供養値魂・最上正覚者方はどんな方もすべて、四つの聖なる絶対の真理を如実に現正覚なさった。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、未来の遍歴で、如実に現正覚するで

あろう供養値魂・最上正覚者方はどんな方もすべて、四つの聖なる絶対の真理を如実に現正覚なさるであろう。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、今、如実に現正覚している供養値魂・最上正覚者方はどんな方もすべて、四つの聖なる絶対の真理を如実に現正覚なさっている。四つとは何であろうか。

五　苦しみの聖なる絶対の真理・苦しみの生起の聖なる絶対の真理・苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理・苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理である。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、過去の遍歴で、如実に現正覚した供養値魂・最上正覚者方はどんな方もすべて、これら四つの聖なる絶対の真理を如実に現正覚なさった。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、未来の遍歴で、如実に現正覚するであろう供養値魂・最上正覚者方はどんな方もすべて、これら四つの聖なる絶対の真理を如実に現正覚なさるであろう。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、今、如実に現正覚している供養値魂・最上正覚者方はどんな方もすべて、これら四つの聖なる絶対の真理を如実に現正覚なさっている。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉供養値魂・最上正覚者の条件

供養値魂であり最上正覚者であるための条件は、四つの聖なる絶対の真理を体得することである。そして、それを達成し、現正覚した魂を供養値魂・最上正覚者というのであるという経典である。これは、過去においても、現在においても、未来においてもそうなのである。

【二五】第五　漏の破壊

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、わたしは気づいて見ることによって、漏の破壊を断言するのであって、気づかないで見ていないのではない。向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、何を気づいて見ることによって、漏の破壊があるのだろうか。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、『これは苦しみである』と気づいて見ることによって、漏の破壊がある。『これは苦しみの生起である』と気づいて見ることによって、漏の破壊がある。『これは苦しみの滅尽である』と気づいて見ることによって、漏の破壊がある。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と気づいて見ることによって、漏の破壊がある。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこのように気づいて見ることによって、漏の破壊がある。

向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽で

ある』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉漏の破壊

これは、漏の破壊とは何であるかということを説いた経典である。漏の破壊とは、言い換えれば、四つの聖なる絶対の真理に気づき見ることであると説いていらっしゃる。それによって、わたしたちの心は消耗から解放され、そしてそれによってエネルギーの漏れがいっさいなくなるのだということを言っていらっしゃるのである。

【三六】第六　友達

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く慈しみなさい。そして聴聞すべきことを考えさせなさい、友達や友人たちや親族たちや親類たちのだれでもを。向煩悩滅尽

多学男たちよ、彼らはあなた方によって、四つの聖なる絶対の真理に対して如実に明察することに鼓舞され、定着され、確立されなければならない。四つとは何であろうか。

三　苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く慈しみなさい。そして聴聞すべきことを考えさせなさい、友達や友人たちや親族たちや親類たちのだれでもを。向煩悩滅尽多学男たちよ、彼らはあなた方によって、四つの聖なる絶対の真理に対して如実に明察することに鼓舞され、定着され、確立されなければならない。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心

すべきである」と。

◉友人や親族に対する慈愛

友人や親族に対して、どのような慈愛を持てばいいのかということを説いていらっしゃる経典である。そして、その慈愛のポイントは、四つの聖なる絶対の真理を、まず慈愛をもって接し、次は聞かせ、考えさせ、実践させるということである。

ではそのときに、サポーターとしての、つまり補助者としての向煩悩滅尽多学男は、いったいどのように対象に対さなければならないのか。

まず第一に、鼓舞すること。鼓舞というのは、このような法則を実践すればこうなるんだということを力強く確信を持って言ってあげることである。第二が、その法則を定着させるということ。そして第三は、その定着したものを実際問題として具体的に立ち上げて実践させ、自分のものにさせてしまうということである。

【二七】第七　種々の真理

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら四つの聖なる絶対の真理がある。四つとは何であろうか。
三　苦しみの聖なる絶対の真理・苦しみの生起の聖なる絶対の真理・苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理・苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理である。
四　向煩悩滅尽多学男たちよ、これらは実に四つの聖なる絶対の真理であり、種々の真理であり、種々の異ならない真理であり、不可避である。この理由ゆえに、種々の聖なる絶対の真理といわれる。
五　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉「絶対の真理」と「真理」

ここで、絶対の真理（sacca）と真理（tatha）の違いについて説明しよう。

まず、「絶対の真理」というのは、条件を度外視して成立する真理ということができる。ところが、「真理」というのは、条件によって成立した真理ということができるのである。

具体的にいえば、まず「絶対の真理」というのは、いかなる状況においても、わたしたちは死があるし、その死の束縛があるし、例えば人生において悲嘆とか、いろいろな苦しみがあるわけだが、その状況、その生起、滅尽、滅尽に至る方法、これを絶対の真理といっているわけである。

ところが、「真理」というのはそうではなくて、いろいろな現象における、その法則性が条件つきであるという真理なのである。例えば、ヒナヤーナにおける真理とか、マハーヤーナにおける真理などがそれに当たる。

【三八】第八　世界

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら四つの聖なる絶対の真理がある。四つとは何であろうか。

三　苦しみの聖なる絶対の真理・苦しみの生起の聖なる絶対の真理・苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理・苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理である。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、愛欲神と共にあり、破滅天と共にあり、神聖天と共にある世界、出家修行者や祭司・愛欲神や人々と共にある弟子において、真理勝者は聖人なのである。この理由ゆえに、種々の聖なる絶対の真理といわれる。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉聖人

この経典は、聖人の定義を述べている。つまり、聖人とは、四つの聖なる絶対の真理を実践し体得した真理勝者のことを指しているのである。

【二九】第九　理解できる、あるいは証智できる

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら四つの聖なる絶対の真理がある。四つとは何であろうか。

三　苦しみの聖なる絶対の真理・苦しみの生起の聖なる絶対の真理・苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理・苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に四つの聖なる絶対の真理である。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら四つの聖なる絶対の真理には、理解できる聖なる絶対の真理があり、捨断できる聖なる絶対の真理があり、現証できる聖なる絶対の真理があり、修習できる聖なる絶対の真理がある。

向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、理解できる聖なる絶対の真理とは何であろうか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、苦しみの聖なる絶対の真理は理解できる。苦しみの生起の聖なる絶対の真理は捨断できる。苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理は現証できる。苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理は修習できる。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉理解・捨断・現証・修習

この経典は、たいへん大切な経典である。もちろん前項とのダブりが存在するわけだが、何を出家修行者は理解し、何を捨断し、何を現証し、何を修習したら

いいかについて説かれている。

つまり、理解する対象となるものは苦しみであり、捨断する対象となるものは苦しみの生起であり、そして現証する対象としては、苦しみの滅尽である。そして、修習する対象としては、苦しみの滅尽に至る方法であると説くのである。

◉理解・捨断・現証・修習の具体的実践

ところでまず、その苦しみを理解するということは、どういうことであろうか。これは五つのとらわれの集積について理解するということである。では次に、捨断するとは何を捨断するのか。それは非神秘力と生存渇愛である。では、何を現証するのか。それは神秘力と離解脱である。そして、何を修習するのか。それは聖なる八段階の道であると同時に、寂止（じゃくし）と正観（せいかん）である。

【三〇】第十　ガヴァンパティ

一　あるとき、多くの高弟たちである向煩悩滅尽多学男たちは、チェーティ（思念）国のサハンチャニカ（小さな大喜びと共にある）にとどまっていた。

二　ところでそのとき、多くの高弟たちである向煩悩滅尽多学男たちは、食事の後に、施し物のための巡回から戻り、先のとがった屋根のある円形の会館に一緒に座り集まり、この気晴らしの話が生じた。

「友よ、いったい苦しみをわかる者は、苦しみの生起を同様にわかり、苦しみの滅尽を同様にわかり、苦しみの滅尽に至る方法を同様にわかるのであろうか」と。

三　このように言われたとき、聖者ガヴァンパティ（牛の支配者）は、高弟たちである向煩悩滅尽多学男たちにこう言った。

「友よ、わたしはそれを世尊に直面して伺い、直面してお受けしました。

四『向煩悩滅尽多学男たちよ、苦しみをわかる者は、苦しみの生起を同様にわかり、苦しみの滅尽を同様にわかり、苦しみの滅尽に至る方法を同様にわかる。

苦しみの生起をわかる者は、苦しみを同様にわかり、苦しみの滅尽を同様にわかり、苦しみの滅尽に至る方法を同様にわかる。苦しみの滅尽をわかる者は、苦しみを同様にわかり、苦しみの生起を同様にわかり、苦しみの滅尽に至る方法を同様にわかる。苦しみの滅尽に至る方法をわかる者は、苦しみを同様にわかり、苦しみの生起を同様にわかり、苦しみの滅尽を同様にわかる』と。」

◉絶対の真理の四つの関係

これは、四つの聖なる絶対の真理は、四つの法則がセットで存在し、その一つが完全に理解できたならば、他の三つも付随的に完全な形で理解し実践することができることを説いている経典である。

第四章

シッソノキの林品

【三一】第一　シッソノキ

一　あるとき、世尊はコーサンビー（インドセンダン）のシッソノキの林にとどまっておられた。

二　直ちに、世尊は種々のかすかなシッソノキの葉を手で持って、向煩悩滅尽多学男たちに呼びかけられた。

「向煩悩滅尽多学男たちよ、これについてどう思うか。わたしの手で持たれた種々のかすかなシッソノキの葉と、あるいはこの最上部のシッソノキの林にあるものとでは、いったいどちらがより多いだろうか」と。

「尊師よ、わずかなのは、世尊の手で持たれた種々のかすかなシッソノキの葉であり、なおまた、この最上部のシッソノキの林にあるもの、これらがまさにより多いのです」と。

三　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、証智してわたしによって君たちに言明されなかったこと、これはまさにより多く、言明されたことはわずかである。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、なぜこれはわたしによって言明されなかったのか。向煩悩滅尽多学男たちよ、というのは、これは利益を伴わず、神聖行の最初ではなく、現世否定・離愛著・滅尽・臨寂静・証智・正覚・煩悩破壊に至らしめないからである。この理由ゆえに、それがわたしによって言明されなかったのである。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、わたしによって言明されたのは何か。向煩悩滅尽多学男たちよ、『これは苦しみである』と、わたしによって言明された。『これは苦しみの生起である』と、わたしによって言明された。『これは苦しみの滅尽である』と、わたしによって言明された。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と、わたしによって言明された。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、なぜこれはわたしによって言明されたのか。向煩悩滅尽多学男たちよ、というのは、これは利益を伴い、これは神聖行の最初であり、これは現世否定・離愛著・滅尽・臨寂静・証智・正覚・煩悩破壊に

至らしめるからである。この理由ゆえに、それが言明されたのである。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉広大な真理の法則

この経典『シッソノキ』の内容は、わたしたちに大きな示唆を与えてくれる。

つまり、サキャ神賢は、現代的な言い方をするならば〝超天才〟に属する魂である。そして、超天才に属する魂は、別の言い方をすれば〝超有能な師〟ということになる。そして、超有能な師は、まず弟子たちの資質を見、そしてその資質に応じて法則を説き明かす。

もちろん、サキャ神賢が解脱なさり、そして法をお説きになられてから、わず

か四十数年しかこの世に存在しておられなかったわけだから、当然その法則の量も少なかったということができる。しかしそれは、サキャ神賢が、今目の前にいる弟子たちが何を実践すれば最も利益になり、そして煩悩破壊に至るのかということをお考えになった上でお説きになったんだということを、この経典は示しているのである。

そして、同じように、例えばヴィパッシー真理勝者や、あるいはカッサパ真理勝者のように、何万年という年月をかけて法則を説き明かすような真理勝者になると、その教えの内容も当然多岐にわたり、豊富にわたり、そして高度化するのである。

したがって、今現存する仏典だけが絶対の真理のすべてではなく、その一部であることを仏教徒は認識すべきである。

【三二】第二　アセンヤクノキ

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、『わたしは苦しみの聖なる絶対の真理を如実に明察せず、苦しみの生起の聖なる絶対の真理を如実に明察せず、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理を如実に明察せず、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理を如実に明察せず、完全に苦しみの終極を行なうだろう』とこのように断言したなら、この道理は存在しない。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、『わたしは、種々のアセンヤクノキの葉、あるいは種々のマラッカノキの葉、あるいは種々のヒマラヤマツの葉の入れ物を作り、水やパルミラヤシの葉を持ってこよう』とこのように断言したなら、この道理が存在しないようなものである。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、『わたしは苦しみの聖なる絶対の真理を如実に明察せず、苦しみの生起の聖なる絶対の真理を如実に明察せず、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理を如実に明察せず、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる

絶対の真理を如実に明察せず、完全に苦しみの終極を行なうだろう』とこのように断言したなら、この道理は存在しない。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして実に、『わたしは苦しみの聖なる絶対の真理を如実に明察し、苦しみの生起の聖なる絶対の真理を如実に明察し、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理を如実に明察し、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理を如実に明察して、完全に苦しみの終極を行なうだろう』とこのように断言したなら、この道理は存在する。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、『わたしは、種々の紅蓮華（べにれんげ）の葉、あるいは種々のハナモツヤクノキの葉、あるいは種々のつる植物の葉の入れ物を作り、水やパルミラヤシの葉を持ってこよう』とこのように断言したなら、この道理が存在するようなものである。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、『わたしは苦しみの聖なる絶対の真理を如実に明察し、苦しみの生起の聖なる絶対の真理を如実に明察し、苦しみの滅

尽の聖なる絶対の真理を如実に明察し、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理を如実に明察して、完全に苦しみの終極を行なうだろう』とこのように断言したなら、この道理は存在する。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉苦しみの終極に至る絶対の真理

この比喩（ひゆ）について説明しておこう。

まず、アセンヤクノキ、ヒマラヤマツ、マラッカノキの葉、つまり、器ができないような細い葉っぱで器を作ろうとしても、水も葉っぱも持ってくることはできない。それと同じように、四つの聖なる絶対の真理を実践しないで、完全に苦

しみの終極を行なうとは言えないということである。
それから逆に今度は、紅蓮華、ハナモツヤクノキ、つる植物の葉といった大きな葉っぱでは、当然、水やパルミラヤシの葉というものを運ぶことができる。それと同じように、四つの聖なる絶対の真理を実践すれば、完全に苦しみの終極を行なうと言えるのである。

【三三】第三 棒

二 「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、空中高く投げ飛ばした棒が、同様に一度根によって地に落ち、同様に一度真ん中で地に落ち、同様に一度先端で地に落ちるようなものである。
向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、種々の生命体は、非神秘力の障害である渇愛のきずなのために転生し生まれ変わって、同様に一度この世界から高い世界に行き、同様に一度高い世界からこの世界に来る。これはどうしてか。向煩悩

滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。

三　苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉転生のコントロール

この経典は、四つの聖なる絶対の真理を実践するなら、高い世界へ転生し、そこから落ちないということを言っていらっしゃる。

この比喩についてだが、あるときは根本から落ち、あるときは真ん中から落ち、あるときは先端から落ちる棒というのは、あるときは低い世界へ落ちたり、あるときは同じ世界へ生まれたり、あるときは高い世界へ生まれるという転生の状態を表わしている。つまり、転生のコントロールができないということである。

【三四】 第四　身に着けている衣服

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、身に着けている衣服や頭が炎を上げて燃えているとき、なすべきことは何であろうか」と。

「尊師よ、身に着けている衣服や頭が炎を上げて燃えているとき、まさにその身に着けている衣服や頭を消すために、非凡な決意と奮闘と勉励と勤勇と不退転と記憶修習と正智がなすべきことです」と。

三　「向煩悩滅尽多学男たちよ、炎を上げて燃えている身に着けている衣服や頭を無頓着に見て、作意せずに、明察されていない四つの聖なる絶対の真理に対し

て如実に明察するために、非凡な決意と奮闘と勉励と勤勇と不退転と記憶修習と正智がなすべきことである。四つとは何であろうか。

四　苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉非凡な決意・奮闘・勉励・勤勇・不退転・記憶修習・正智

この経典は要するに、生命を保全するために最も危険な状態、つまり服が燃えて髪の毛が燃えているような状態のときに、どうしなければいけないかという第

一の前提条件がある。

それに対しては、まず「非凡な決意」。非凡な決意というのは、当然もう死ぬか生きるかだから、これは非凡な決意が必要となる。

第二は「奮闘」。当然それは、炎を消すために、水を使ったり転がったり、いろんな奮闘努力が必要となる。

第三は「勉励」。そしてそれは、あきらめないでとにかくひたすらやり続けるということが必要となる。

第四は「勤勇」。これはもうよりいっそう激しくなるわけだが、徹底的に勇気をもって、その生命を保全するために努力する必要があると言っているわけである。

第五は「不退転」。そして、絶対に自分はこれを消すんだという意識がないと、生きるんだという意識がないと、当然これはできないということである。

第六は「記憶修習」。記憶修習については、こういう燃えているときは何をど

うしたらいいかということを、記憶を喚起して、そのとおりにやる必要があるということだ。
そして「正智」となるわけだが、その最も偉大なものというのは、正しい智慧であり、その状態のときは例えば水をかけるとか、砂をかけるとか、いろんなことを直観的に知るという、直観的に使えるような智慧を引き出す必要があるのである。

◉不死を得るための実践

そして、これよりも、なおさら不死を得るための修行というものは、例えば自分のその生命に対する愛着の状態があったとしても、それに全く頓着することなく、今の実践を行なえというのである。
つまり、そういう生命に危険がある状態であったとしても、それを不死というターゲットのもとに、頓着せずに瞑想するという、そういう意識がないとだめだ

ということである。

◉正智

「正智」についてだが、わたしたちが、この悪趣から脱却するためにする記憶修習、その記憶修習を繰り返し繰り返し行なっているうちに、わたしたちは悟りへと到達する。その小さな悟りのことを、正しい智慧——正智といっているのである。

そして、この正しい智慧の集積が、最終的にわたしたちを離解脱させ、そして離解脱によって正精通が生じ、離解脱精通が生じるのである。

【三五】第五　百の槍

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、百歳の寿命で、百歳の生命の男がいて、この者にこのように話しかけるようなものである。

『来なさい。いいかい、男よ、早朝にお前を百の槍で攻撃し、正午に百の槍で攻撃し、夕刻に百の槍で攻撃しよう。いいかい、男よ、実にそのお前は、毎日毎日三百回ずつの槍で攻撃されながら、百歳の寿命で、百歳生きていて、百歳を経過してから、明察されていない四つの聖なる絶対の真理を明察するだろう』と。

向煩悩滅尽多学男たちよ、思慮のある善男子は、実に達しなければならない。

これはどうしてか。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、種々の槍の一撃・種々の剣の一撃・種々の手斧の一撃の無始の極めて以前の生まれ変わりが認識されず理解されないからである。向煩悩滅尽多学男たちよ、このようにたとえそれが行なわれても、向煩悩滅尽多学男たちよ、その場合においては、わたしは、苦しみと共にあり激痛と共にある四つの聖なる絶対の真理に対して明察を断言しない。向煩悩滅尽多学男たちよ、その上わたしは、楽と共にあり幸福と共にある四つの聖なる絶対の真理に対して断言するのである。四つとは何であろうか。

四　苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉楽と幸福を伴う絶対の真理

わたしたちは、悪業の集積によってこの人間の世界へ転生している。したがって、例えば、朝昼晩と一日三回、百回ずつ槍で突かれたとしても、それで百歳生きるとして、百年後に解脱できるとするならば、それはそれで素晴らしいことである。

しかし、この一日百回掛ける三の三百回、槍で突かれるような人生、あるいは、これが槍でなくて剣や斧で体を切られるような人生がそこに存在していたとしても、それによって完全煩悩破壊、そして絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜へと到達することはできるとは言わない。「できない」ではなくて、「できるとは言わない」と、サキャ神賢は説いていらっしゃる。

しかし、そういう法則ではなく、もし苦しみ、苦しみの生起、苦しみの滅尽、苦しみの滅尽に至る方法に対して、理解・捨断・現証・修習という四つの実践を行なうならば、それは楽と幸福を伴いながら、絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜の真我独存に到達するんだと、この経典では説いていらっしゃる。

「楽と共にあり幸福と共にある」というのは、その実践の途上でも、楽、幸福が出てくるということである。一方は、その到達する途上が全部苦しみであり、到達するかどうかはわからない。だが、楽と幸福を伴う方は必ず到達するのである。

【三六】第六　種々の生き物

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、男がこのバラリンゴの大陸の中の草木や一片の木材や枝葉を切って、同じ場所にかき集め、同じ場所にかき集めると、先のとがったくいを作り、先のとがったくいを作ると、大海の中の種々の大きな生き物を種々の大きな先のとがったくいで刺し貫き、大海の中の種々の中間の生き物を種々の中間の先のとがったくいで刺し貫き、大海の中の種々の微細な生き物を種々の微細な先のとがったくいで刺し貫き、向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、大海の中には消費されていない種々の粗大な生き物がいて、それで、このバラリンゴの大陸の中のそれらの草木や一片の木材や枝葉の消費を消費し続けても、向煩悩滅尽多学男たちよ、現状では、大海の中には、種々の先のとがったくいで貫くことはたやすくない、実により多くの微細な生き物がいるようなものである。

これはどうしてか。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、姿の微細な本質によるのである。向煩悩滅尽多学

男たちよ、このように実に離別は大きい。向煩悩滅尽多学男たちよ、このように、『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解する魂は、実に大きな離別から完全に解脱して、見解を獲得しているのである。

四 向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉魂と愛欲のとらわれの関係

この経典は、魂と愛欲のとらわれの関係について説いた経典である。そして、種々の草木、あるいは木の一片から作ったくいとは、そのとらわれの対象と、と

らわれの関係を表わしている。
しかし、もし心が微細であるとするならば、つまり魂の本質が微細であるとするならば、そのようなくいに、例えば粗大であったとしても微細であったとしても貫かれることはない。つまり、心が粗雑なるがゆえにそのくいに貫かれるわけで、心が微細であるならば、現象に対する正しい認識がなされているとするならば、それはそのようなくいに貫かれないと、この経典では説いている。

◉離別

では、なぜそのくいに貫かれないのか。それは、もともと離別という苦しみが存在していて、その離別にターゲットを絞って生きているならば、微細な心が生じるからである。
では、その離別イコール微細な心をどのように体得するのか。それは、四つの聖なる絶対の真理を実践すればよろしい。

【三七】第七　太陽のたとえ話（一）

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、太陽が昇天するとき、これに先立ち、この前兆となるのは、すなわち日の出である。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、四つの聖なる絶対の真理を如実に明察すること、これに先立ち、この前兆となるのは、すなわち正見解である。

三向煩悩滅尽多学男たちよ、正見解を持つ向煩悩滅尽多学男には、『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解する、これが望まれるべきである。

向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心す

べきである」と。

◉正見解の必要性

この経典は、四つの聖なる絶対の真理を体得するために何が必要かということを説いている。それは正見解である。

ところで、この正しい見解は別にどのような表現がなされているか。それは、「眼が生じ、精通が生じ……」という言葉があったが、その〝眼〟に当たるのである。

【三八】第八　太陽のたとえ話（二）

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、月と太陽が世界に生じない限りは、その場合には、まさに大いなる光が生じることはなく、大いなる光明が生じることはなく、そのとき、目の見えないほどの闇があり、暗黒の暗がりがある。その場

合には、まさに昼夜は認識されず理解されず、月と半月は認識されず理解されず、季節と一年は認識されず理解されない。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして実に、月と太陽が世界に生じるときから、それで大いなる光が生じることがあり、大いなる光明が生じることがあり、そのとき、目の見えないほどの闇がなく、暗黒の暗がりがない。それで、昼夜は認識され理解され、月と半月は認識され理解され、季節と一年は認識され理解される。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、供養値魂・最上正覚者であられる真理勝者が流転なさらない限りは、その場合には、まさに大いなる光が生じることはなく、大いなる光明が生じることはなく、そのとき、目の見えないほどの闇があり、暗黒の暗がりがある。その場合には、まさに四つの聖なる絶対の真理に対して種々の明かすことがなく、種々の教えがなく、種々の認識させ理解させることがなく、種々の立証することがなく、種々の覆われたものを取り払うことがなく、種々の分別がなく、偏見のない要素の蓄積がない。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、供養値魂・最上正覚者であられる真理勝者が世界に流転なさるときから、それで大いなる光が生じることがあり、大いなる光明が生じることがあり、そのとき、目の見えないほどの闇がなく、暗黒の暗がりがない。なおまた、四つの聖なる絶対の真理に対して種々の明かすことがあり、種々の教えがあり、種々の認識させ理解させることがあり、種々の立証することがあり、種々の覆われたものを取り払うことがあり、種々の分別があり、偏見のない要素の蓄積がある。四つとは何であろうか。

六　苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心

すべきである」と。

◉闇を払う真理勝者

この経典はたいへん重要な経典の一つである。それは、真理勝者の定義を述べたと思うが、その真理勝者が登場しない限り、例えばいくら仏典が存在していたとしても、その世界は闇であるということが説かれているからである。

ところで、真理勝者とは何かというと、要するにグルなしに解脱する魂のことを表わしている。そして、グルなしに解脱する魂ということであるが、ここでいわれているグルとは、あくまでも真理勝者のことであり、真理勝者の滅後、しばらく正法が残り、そして闇が生じ、その闇にまた真理勝者が登場して初めて光が生じ、そしていろいろな形の救済が行なわれたといえるのである。

◉真理勝者の救済

その救済とは何か。

まず「明かすこと」である。つまり、経典その他に説かれていることの真の意味を明かされるとか、あるいは隠された教えを明かされるということである。

次に「教え」である。この「教え」というのは、その真理勝者が、登場した時代の道具をうまく利用しながら、真理の教えを展開するということに当たる。

次の「認識させ理解させること」というのは、実際問題として、その教えを浸透させ、体得させるということをいっている。

次の「立証」は、「現証」という言葉と置き換えても構わない。つまり、弟子たちに、あるいは信徒に対して、それを体得させて、それをより現証させるというふうにとらえられる。

次の「覆われたものを取り払うこと」というのは、煩悩あるいは苦しみ、これは実際は本質ではないわけで、その煩悩や苦しみを取り払うということである。

次の「分別」とは、何をなせばどうなる、かにをなせばどうなる――、つまりカルマの法則を展開するということを表わしている。

そして最後の「偏見のない要素の蓄積」とは、要するに、魂にとって利益のある実践のみを展開するということだ。本質的に利益になる実践のみを展開するということである。

それらの法則を説き明かす――、これが真理勝者なのである。

【三九】第九　神々の王のくい

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く、『これは苦しみである』と如実に認識せず理解せず、『これは苦しみの生起である』と如実に認識せず理解せず、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識せず理解せず、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識せず理解しない出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人も、

『この大家はきっと気づいていて気づいていて、わかってわかっている。』

と、他の出家修行者や、あるいは祭司の顔を眺める。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、軽く、風にとらわれ、平坦な区域に置かれたキワタや木綿は、すぐに東の風が西にかき集め、西の風が東にかき集め、北の風が南にかき集め、南の風が北にかき集めるようなものである。

これはどうしてか。向煩悩滅尽多学男たちよ、木綿の軽さの本質によるのである。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、『これは苦しみである』と如実に認識せず理解せず、『これは苦しみの生起である』と如実に認識せず理解せず、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識せず理解せず、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識せず理解しない出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人も、

『この大家はきっと気づいていて気づいていて、わかってわかっている。』

と、他の出家修行者や、あるいは祭司の顔を眺める。
　これはどうしてか。向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。
五　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして実に、『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解する出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人も、『この大家はきっと気づいて気づいていて、わかってわかっている。』と、他の出家修行者や、あるいは祭司の顔を眺めない。
六　向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、根もとが深く、大変掘り返されており、確固として、震動することがない鉄のくいや神々の王のくいがあって、たとえ同様に東の方角から強い風と降雨がこちらに来ても、まさにそれは揺れず、震動せず、一緒に揺り動かされず、たとえ同様に西の方角から強い風と降雨がこちらに

来ても、まさにそれは揺れず、震動せず、一緒に揺り動かされず、たとえ同様に北の方角から強い風と降雨がこちらに来ても、まさにそれは揺れず、震動せず、一緒に揺り動かされず、たとえ同様に南の方角から強い風と降雨がこちらに来ても、まさにそれは揺れず、震動せず、一緒に揺り動かされないようなものである。

これはどうしてか。向煩悩滅尽多学男たちよ、神々の王のくいの根もとの深さの状態によるのであり、大変掘り返されたことの本質によるのである。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして実に、全く同様に、『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解する出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人も、

『この大家はきっと気づいて気づいていて、わかってわかっている。』

と、他の出家修行者や、あるいは祭司の顔を眺めない。

これはどうしてか。向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して正しく実感した本質によるのである。四つとは何であろうか。

八　苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

九　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉真理の体得とその深さ

教えの本質というものは、その魂がどれほど真理と前生から縁があり、あるいは今生において深く掘り下げ、そして自分の内側に体得しているかどうかで決ま

るということを表わしている。
そして、そうでない修行者や、あるいは一般の人たちは、真理であるかないかを計る目安を持っていないがゆえに絶えず揺れ動いている。そして、その揺れ動いている結果として、心は絶えずかき乱され、そして右へ行ったり左へ行ったりする。
「他の出家修行者や祭司の顔を眺める」というのは、それを表わしている。例えば、教えを自分の中で体得していない場合は、あっちの人に行って聞いたり、こっちの人に行って聞いたり、「ああ、そうだそうだ」と左に流れたり、「ああ、そうだそうだ」と右に流れたりするのである。
しかし、もし真理が完全に修行者の心を深く掘り下げ、そして深い部分に固定されているならば、いかなる情報に対してもいかなる要素に対しても動かず、そして、確実に四つの聖なる絶対の真理を体得できると、この経典は説いているのである。

【四〇】第十　教義を持す者たち

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、なるほど、『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解する向煩悩滅尽多学男はどんな人も、たとえ同様に東の方角から出家修行者や、あるいは祭司がこちらに来て、教義を欲しがり、教義を得ようとし、『彼の言い方を論破しよう』としても、確かに法則と共にある彼を、あるいは揺らし、あるいは震動させ、あるいは一緒に揺り動かすだろうと、この道理は存在しない。

たとえ同様に西の方角から出家修行者や、あるいは祭司がこちらに来て、教義を欲しがり、教義を得ようとし、『彼の言い方を論破しよう』としても、確かに法則と共にある彼を、あるいは揺らし、あるいは震動させ、あるいは一緒に揺り動かすだろうと、この道理は存在しない。

たとえ同様に北の方角から出家修行者や、あるいは祭司がこちらに来て、教義を欲しがり、教義を得ようとし、『彼の言い方を論破しよう』としても、確かに法則と共にある彼を、あるいは揺らし、あるいは震動させ、あるいは一緒に揺り動かすだろうと、この道理は存在しない。

たとえ同様に南の方角から出家修行者や、あるいは祭司がこちらに来て、教義を欲しがり、教義を得ようとし、『彼の言い方を論破しよう』としても、確かに法則と共にある彼を、あるいは揺らし、あるいは震動させ、あるいは一緒に揺り動かすだろうと、この道理は存在しない。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、十六クック（長さの単位）の石の宮殿があって、その八クックが下で根もとに至り、八クック最上部で先端があり、たとえ同様に東の方角から強い風と降雨がこちらに来ても、まさにそれは揺れず、震動せず、一緒に揺り動かされず、たとえ同様に西の方角から強い風と降雨がこちらに来ても、まさにそれは揺れず、震動せず、一緒に揺り動かされず、たとえ

同様に北の方角から強い風と降雨がこちらに来ても、まさにそれは揺れず、震動せず、一緒に揺り動かされず、たとえ同様に南の方角から強い風と降雨がこちらに来ても、まさにそれは揺れず、震動せず、一緒に揺り動かされないようなものである。

これはどうしてか。向煩悩滅尽多学男たちよ、石の宮殿の根もとの深さの状態によるのであり、大変掘り返されたことの本質によるのである。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、なるほど、『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解する向煩悩滅尽多学男はどんな人も、たとえ同様に東の方角から出家修行者や、あるいは祭司がこちらに来て、教義を欲しがり、教義を得ようとし、『彼の言い方を論破しよう』としても、確かに法則と共にある彼を、あるいは揺らし、あるいは震動させ、あるいは一緒に揺り動かすだ

ろうと、この道理は存在しない。

たとえ同様に西の方角から出家修行者や、あるいは祭司がこちらに来て、教義を欲しがり、教義を得ようとし、『彼の言い方を論破しよう』としても、確かに法則と共にある彼を、あるいは揺らし、あるいは震動させ、あるいは一緒に揺り動かすだろうと、この道理は存在しない。

たとえ同様に北の方角から出家修行者や、あるいは祭司がこちらに来て、教義を欲しがり、教義を得ようとし、『彼の言い方を論破しよう』としても、確かに法則と共にある彼を、あるいは揺らし、あるいは震動させ、あるいは一緒に揺り動かすだろうと、この道理は存在しない。

たとえ同様に南の方角から出家修行者や、あるいは祭司がこちらに来て、教義を欲しがり、教義を得ようとし、『彼の言い方を論破しよう』としても、確かに法則と共にある彼を、あるいは揺らし、あるいは震動させ、あるいは一緒に揺り動かすだろうと、この道理は存在しない。

これはどうしてか。向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して正しく実感した本質によるのである。四つとは何であろうか。

五　苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉絶対の真理の理解度

この『教義を持す者たち』の経典の意味合いは、前節と同じであるが、もう少し付け加えておかなければならないことがある。

それは、この当時いろいろな考え方の宗教家が存在し、そして当然向煩悩滅尽多学男や、あるいは向煩悩滅尽多学女は、それらの魂、つまり修行者に対して絶えず対峙し、そしてその教えを交換する機会に恵まれていた。その場合、もし教えの本質が理解されていないとして、他のもっとインスタントな教えを実践しているような教義にぶつかったなら、当然心が揺れるという現象が出てくる。

例えば、本質的に苦しみを滅尽し、そして真理勝者の状態、あるいは覚者の状態になることは時間がかかるわけだが、それがもっと単純になれるだとか、もっと簡単な方法でなれるだとかいう教えを聴くと、当然一般的には揺らぐはずである。

しかし、もし教えの本質、つまりこれ以外にないような絶対の真理というものが自分の中に内在している場合、それを克服しない限り、決して離解脱は生じないということが本来わかるはずである。そして、それがわかった魂、しかもそれが深く根づいている魂は、いかなる情報に対しても心が揺らがないとサキャ神賢

は説いていらっしゃる。

◉専心すべき絶対の真理

そして、ここでのポイントは、それを揺らがせないためにも、まず四つの聖なる絶対の真理を実践し、専心すべきであるし、逆にそれを専心することこそが離解脱の道であるから、これは表裏である、そしてその実践のみが必要なのだと説いていらっしゃるのである。

第五章

がけ品

【四二】第一　思念

一　あるとき、世尊はラージャガハ（国王の家）の竹林にあるカランダカニヴァーパ（リスのえさ）にとどまっておられた。

二　そこで実に、世尊は向煩悩滅尽多学男たちに呼びかけられた。「向煩悩滅尽多学男たちよ、その昔、ある男がラージャガハから出かけて、世界の思念を思念しようと、スマーガダー（優れた香水の行商人）の蓮池（はすいけ）の所に行った。行くと、スマーガダーの蓮池の岸で、世界の思念を思念しつつ座った。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、実に、その男はスマーガダーの蓮池の岸で、四部の軍隊が蓮の茎に入るのを見た。見ると、これがふと心に浮かんだ。『まさしくわたしは気が狂っている。まさしくわたしは狂乱している。世界にあることがないものをわたしは見たんだ』と。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、直ちに、その男は市に入り、多くの人々の集まりに告げた。

『尊者たちよ、まさしくわたしは狂っています。尊者たちよ、まさしくわたしは狂乱しています。世界にあることがないものをわたしは見たのです』と。『いいかい、男よ。ところで、どのようにあなたは気が狂ったんだ。そして、あなたが見た世界にあることがないものとは何なんだ』と。

五　『尊者たちよ、ここにわたしは、ラージャガハから出かけて、世界の思念を思念しようと、スマーガダーの蓮池の所に行きました。行くと、スマーガダーの蓮池の岸で、世界の思念を思念しつつ座りました。尊者たちよ、実に、わたしはスマーガダーの蓮池の岸で、四部の軍隊が蓮の茎に入るのを見たのです。尊者たちよ、実に、わたしはこのように気が狂い、このように狂乱し、そして、わたしが見たこれは、世界にあることがないのです』と。『いいかい、男よ。事実のとおりに、あなたは気が狂っている。事実のとおりに狂乱している。あなたが見たこれは、世界にあることがないのだ』と。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、その場合においては、その男は、まさにその真実

で偽りでないものを見たのである。向煩悩滅尽多学男たちよ、その昔、愛欲神と不飲酒天の戦いがたけなわであった。向煩悩滅尽多学男たちよ、その場合においては、その戦いにおいて、愛欲神たちが勝ち、不飲酒天たちが負けた。向煩悩滅尽多学男たちよ、そして実に、負けた不飲酒天たちはぎょっとし、まさに愛欲神たちに恐怖しながら、蓮の茎から不飲酒天の要塞に入ったのである。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから世界の思念を思念してはならない。『世界は不滅である』と、あるいは『世界は滅亡である』と。『世界は有限の期間である』と、あるいは『世界は無限の期間である』と。『それは霊魂であり、それは肉体である』と、あるいは『霊魂は別であり、肉体は別である』と。『真理勝者は死後存在する』と、あるいは『真理勝者は死後存在しない』と、あるいは『真理勝者は死後存在し、そして存在しない』と、あるいは『真理勝者は死後存在することもなく、存在しないこともない』と。これはどうしてか。

八　向煩悩滅尽多学男たちよ、この思念は利益を伴わず、神聖行の最初ではなく、

現世否定・離愛著・滅尽・臨寂静・証智・正覚・煩悩破壊に至らしめることはないのである。

九　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして実に、君たちは思念しつつ、『これは苦しみである』と思念しなさい。『これは苦しみの生起である』と思念しなさい。『これは苦しみの滅尽である』と思念しなさい。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と思念しなさい。これはどうしてか。

一〇　向煩悩滅尽多学男たちよ、この思念は利益を伴い、これは神聖行の最初であり、これは現世否定・離愛著・滅尽・臨寂静・証智・正覚・煩悩破壊に至らしめるのである。

一一　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉観念の怖さ

この『思念』の経典は、わたしたちに観念の怖さというものを指し示している。「思念する」——イコール「これはこうである、こうあるべきである、例えば今わたしが目の前に見ているものすべてが存在であり、死後はすべてが消えてしまう」と、もしそのような観念的な考え方がその人に固定していれば、例えばその瞑想中に見るいろいろな経験等によって、逆に自分を見失ってしまうことになる。しかし、もしとらわれないでいるとするならば、つまり経験にとらわれないでいるとするならば、いかなる経験をしたとしても、それを淡々と受け止めることができ、そしてそれによって逆に智慧の発達が生じるはずである。

したがって、最後に来る非神秘力、あるいは経験の構成をなぜ仏教において否定しているのかというと、それは、それらが枠組みとなり、それより、より発展した経験をしたときの障礙となるからである。

そして、それらのことを思念するのではなく、苦しみ、苦しみの生起、苦しみ

の滅尽、苦しみの滅尽に至る方法を繰り返し繰り返し実践することによって、逆に多くの経験をわたしたちはすることができる。その経験は、正しい経験となるのである。

◉不飲酒天の世界

不飲酒天の世界についてだが、実際に、広大な湖とも海ともいえるところに、大きな蓮華の花が咲いている。そして、その下に不飲酒天の世界があるわけだが、その大きな蓮華の花の上から出入りする場合と、下から出入りする場合の二つの入り口が存在する。そして、不飲酒天の世界の支配階級の人たちは、水の中を平然と移行し、下から出入りするのである。

なお、四部の軍隊とは、象の軍隊、馬の軍隊、戦車の軍隊、歩兵の軍隊のことである。

【四二】第二　がけ

一　あるとき、世尊はラージャーガハのギッジャクータ（ハゲタカの峰）山にとどまっておられた。

二　直ちに、世尊は向煩悩滅尽多学男たちに呼びかけられた。

「早く、向煩悩滅尽多学男たちよ。昼間の修行場のために、パティバーナクータ（会得の峰）の所に行こう」と。

「わかりました、尊師よ。」

と、実にその向煩悩滅尽多学男たちは、世尊に承諾し申し上げた。

三　直ちに、世尊は多くの向煩悩滅尽多学男たちと一緒に、パティバーナクータの所に行った。実に、ある向煩悩滅尽多学男は、パティバーナクータで大きながけを見た。見ると、世尊にこう申し上げた。

「尊師よ、これは確かに大きながけです。尊師よ、大変すさまじいがけです。尊師よ、いったいこのがけよりも、そしてより大きく、そしてよりすさまじい別の

がけがあるでしょうか」と。
「向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこのがけよりも、そしてより大きく、そしてよりすさまじい別のがけがある」と。
「尊師よ、さて、このがけよりも、そしてより大きく、そしてよりすさまじい別のがけとは何でしょうか」と。
四「向煩悩滅尽多学男よ、全く、『これは苦しみである』と如実に認識せず理解せず、『これは苦しみの生起である』と如実に認識せず理解せず、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識せず理解せず、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識せず理解しない出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人も、出生に至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだし、老いに至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだし、死に至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだし、不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだす。

彼らは出生に至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだして、老いに至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだして、死に至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだして、不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだして、同様に出生に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持し、同様に老いに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持し、同様に死に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持し、同様に不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持する。

彼らは同様に出生に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持して、同様に老いに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持して、同様に不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持して、同様に出生のがけに崩れ落ち、同様に老いのがけに崩れ落ち、同様に死のがけに崩れ落ち、同様に不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みのがけに崩れ落ちる。

彼らは、出生、老い、死、種々の不運な出来事、種々の悲嘆、種々の苦しみ、

種々の激痛、種々の悩みから完全に解脱しない。苦しみから完全に解脱しないと、わたしは断言する。

五　向煩悩滅尽多学男よ、そして実に、『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解する出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人も、出生に至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いださず、老いに至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いださず、死に至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いださず、不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いださない。

彼らは出生に至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いださず、老いに至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いださず、死に至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いださず、不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめ

る種々の経験の構成に楽しみを見いださずに、同様に出生に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持せず、同様に老いに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持せず、同様に死に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持せず、同様に不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持しない。

彼らは同様に出生に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持しないで、同様に老いに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持しないで、同様に死に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持しないで、同様に不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持しないで、同様に出生のがけに崩れ落ちず、同様に老いのがけに崩れ落ちず、同様に死のがけに崩れ落ちず、同様に不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みのがけに崩れ落ちない。

彼らは、出生、老い、死、種々の不運な出来事、種々の悲嘆、種々の苦しみ、種々の激痛、種々の悩みから完全に解脱する。苦しみから完全に解脱すると、わ

たしは断言する。
六　だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉恐怖の〝がけ〟

この経典の内容は、四つの聖なる絶対の真理を理解しないで生きた場合、要するに、その現実のがけよりもっと怖いがけに崩れ落ちる。つまり、落下することを説いた経典である。

【四三】第三　苦痛

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、『大きな苦痛』という名前の激苦地獄がある。そこでは、目によって見る形状-容姿のどんなものも、まさに希望しない形状-容姿

を見て、希望した形状‐容姿を見ることは全くなく、まさに楽しまない形状‐容姿を見て、楽しむ形状‐容姿を見ることは全くなく、愉快でない形状‐容姿を見て、愉快な形状‐容姿を見ることは全くない。

耳によって聞く声のどんなものも、まさに希望しない声を聞き、希望した声を聞くことは全くなく、まさに楽しまない声を聞き、楽しむ声を聞くことは全くなく、まさに愉快でない声を聞き、愉快な声を聞くことは全くない。

鼻によってにおいをかぐ香りのどんなものも、まさに希望しない香りのにおいをかぎ、希望した香りのにおいをかぐことは全くなく、まさに楽しまない香りのにおいをかぎ、楽しむ香りのにおいをかぐことは全くなく、まさに愉快でない香りのにおいをかぎ、愉快な香りのにおいをかぐことは全くない。

舌によって味わう味のどんなものも、まさに希望しない味を味わい、希望した味を味わうことは全くなく、まさに楽しまない味を味わい、楽しむ味を味わうことは全くなく、まさに愉快でない味を味わい、愉快な味を味わうことは全くない。

身によって接触する接触のどんなものも、まさに希望しない接触に接触し、希望した接触に接触することは全くなく、まさに楽しまない接触に接触し、楽しむ接触に接触することは全くなく、まさに愉快でない接触に接触し、愉快な接触に接触することは全くない。

意識によって識別する法則のどんなものも、まさに希望しない形状-容姿（法則）を識別し、希望した形状-容姿（法則）を識別することは全くなく、まさに楽しまない形状-容姿（法則）を識別し、楽しむ形状-容姿（法則）を識別することは全くなく、まさに愉快でない形状-容姿（法則）を識別し、愉快な形状-容姿（法則）を識別することは全くない」と。

三　このように演説されたとき、ある向煩悩滅尽多学男は世尊にこう申し上げた。「尊師よ、それは本当に大きな苦痛です。尊師よ、それは本当に大変大きな苦痛です。尊師よ、いったいこの苦痛よりも、そしてより大きく、そしてよりすさまじい別の苦痛があるでしょうか」と。

「向煩悩滅尽多学男よ、実にこの苦痛よりも、そしてより大きく、そしてよりすさまじい別の苦痛がある」と。

「尊師よ、さて、この苦痛よりも、そしてより大きく、そしてよりすさまじい別の苦痛とは何でしょうか」と。

四「向煩悩滅尽多学男よ、全く、『これは苦しみである』と如実に認識せず理解せず、『これは苦しみの生起である』と如実に認識せず理解せず、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識せず理解せず、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識せず理解しない出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人も、出生に至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだし、老いに至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだし、死に至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだし、不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだす。

彼らは出生に至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだして、老いに至ら

しめる種々の経験の構成に楽しみを見いだして、死に至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだして、不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだして、同様に出生に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持し、同様に老いに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持し、同様に死に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持し、同様に不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持する。

彼らは同様に出生に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持して、同様に老いに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持して、(同様に死に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持して)、同様に不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持して、同様に出生の苦痛によってあぶられ、同様に老いの苦痛によってあぶられ、同様に死の苦痛によってあぶられ、同様に不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みの苦痛によってあぶられる。

彼らは、出生、老い、死、種々の不運な出来事、種々の悲嘆、種々の苦しみ、種々の激痛、種々の悩みから完全に解脱しない。苦しみから完全に解脱しないと、わたしは断言する。

五　向煩悩滅尽多学男よ、そして実に、『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解する出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人も、出生に至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いださず、老いに至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いださず、死に至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いださず、不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いださない。

彼らは出生に至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いださず、老いに至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いださず、死に至らしめる種々の経験の構

成に楽しみを見いださず、不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いださずに、同様に出生に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持せず、同様に老いに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持せず、同様に死に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持せず、同様に不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持しない。

彼らは同様に出生に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持しないで、同様に老いに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持しないで、同様に死に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持しないで、同様に不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持しないで、同様に出生の苦痛によってあぶられず、同様に老いの苦痛によってあぶられず、同様に死の苦痛によってあぶられず、同様に不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みの苦痛によってあぶられない。

彼らは、出生、老い、死、種々の不運な出来事、種々の悲嘆、種々の苦しみ、種々の激痛、種々の悩みから完全に解脱する。苦しみから完全に解脱すると、わたしは断言する。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉流転の苦痛

この経典は一見わかりづらい。つまり、六境の対象となる世界がすべて苦しみである世界より、なぜ苦しみの世界へと流転し続けることが、より苦しみなのかということについてわかりづらいのである。しかし、よく考えてみると、その内容はよく理解できる。

つまり、この六境の対象が苦しみである地獄は、その法則、つまり因が完全に切れ落ちた段階でそこから離脱し、そして例えば天界へ至ることができるし、また、その六境が苦しみであることを思念し続けるというように、逆に解脱のチャンスも出てくる。

しかし、わたしたちがこの人間の世界を含めた多くの愛欲の世界に渇愛し、そして流転を繰り返す場合、その流転には終わりがない。つまり、苦しみの総量からいったら、明らかに地獄の苦しみより多いのである。

よって、わたしたちがそれよりもより多くの苦しみ、つまり本質的な苦しみから解放されるためには、四つの聖なる絶対の真理を実践するしかないというのが、この経典の内容である。

【四四】第四　家の屋根

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く、『わたしは苦しみの聖なる絶対の真理を如

実に明察せず、苦しみの生起の聖なる絶対の真理を如実に明察せず、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理を如実に明察せず、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理を如実に明察せずに、完全に苦しみの終極を行なうであろう』と、このように断言したなら、この道理は存在しない。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、『わたしは家の屋根のすぐ前に家を作らずに、家の最上部を上に置こう』と、このように断言したなら、この道理は存在しないようなものである。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、『わたしは苦しみの聖なる絶対の真理を如実に明察せず、苦しみの生起の聖なる絶対の真理を如実に明察せず、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理を如実に明察せず、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理を如実に明察せずに、完全に苦しみの終極を行なうであろう』と、このように断言したなら、この道理は存在しないのである。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして実に、『わたしは苦しみの聖なる絶対の真

理を如実に明察し、苦しみの生起の聖なる絶対の真理を如実に明察し、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理を如実に明察し、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理を如実に明察し、完全に苦しみの終極を行なうであろう』と、このように断言したなら、この道理は存在する。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、『わたしは家の屋根のすぐ前に家を作って、家の最上部を上に置こう』と、このように断言したなら、この道理は存在するようなものである。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、『わたしは苦しみの聖なる絶対の真理を如実に明察し、苦しみの生起の聖なる絶対の真理を如実に明察し、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理を如実に明察し、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理を如実に明察して、完全に苦しみの終極を行なうであろう』と、このように断言したなら、この道理は存在するのである。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきで

ある。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉家の比喩

家の屋根を載せる前に、家を造らないで、家の最上部を上に置いてしまうことはできない、逆に、家の屋根を載せる前に、家を造っておいて、家の最上部を上に置くことはできるというのが、この比喩である。

つまり、四つの聖なる絶対の真理なくして、苦しみの終極を行なうことはできないというのである。

【四五】第五 穴の空間（一）

一 あるとき、世尊はヴェーサーリー（広大王によって作られた都市）の大林に

ある重閣講堂にとどまっておられた。

二　直ちに、聖者アーナンダ（快楽）は、早朝正装して、上衣と鉢を持って、食事として与えられる施し物のために、ヴェーサーリーに入った。

三　実に、聖者アーナンダは、多くのリッチャヴィ（退屈な派手な色）の少年たちが、会議場で弓技を行ない、次々に矢をしくじらせたことはなく、まさに遠くから微細な鍵穴の空間を通過させて矢を遠くへ放つのを見た。

四　見ると、彼にはこれがふと心に浮かんだ。

「これらリッチャヴィの少年たちは、確かに学んでいる。これらリッチャヴィの少年たちは、確かに正しく学んでいる。全く、次々に矢をしくじらせたことはなく、まさに遠くから微細な鍵穴の空間を通過させて矢を遠くへ放ったからである」と。

五　直ちに、聖者アーナンダはヴェーサーリーで施し物のために歩き回り、食事の後に、施し物のための巡回から戻り、世尊の所に行った。行くと、世尊に敬礼

してそばに座った。そばに座った聖者アーナンダは、実に世尊にこう申し上げた。

六「尊師よ、ここにわたしは、早朝正装して、上衣と鉢を持って、食事として与えられる施し物のためにヴェーサーリーに入りました。尊師よ、実に、わたしは多くのリッチャヴィの少年たちが、会議場で弓技を行ない、次々に矢をしくじらせたことはなく、まさに遠くから微細な鍵穴の空間を通過させて矢を遠くへ放っているのを見ました。見ると、わたしにはこれがふと心に浮かんだのです。『これらリッチャヴィの少年たちは、確かに学んでいる。これらリッチャヴィの少年たちは、確かに正しく学んでいる。全く、次々に矢をしくじらせたことはなく、まさに遠くから微細な鍵穴の空間を通過させて矢を遠くへ放ったからである』と。」

七「アーナンダよ、これについてどう思うか。次々に矢をしくじらせたことはなく、まさに遠くから微細な鍵穴の空間を通過させて矢を遠くへ放つことと、あるいは、百の部分に分裂させせられたしっぽの毛の端から端を突き通すこととでは、

よりなし難く、あるいはより成し遂げ難いのは、いったいどちらであろうか」と。「尊師よ、まさにこれは、百の部分に分裂させられたしっぽの毛の端から端を突き通すことが、まさによりなし難く、そしてより成し遂げ難いのです」と。

八　「アーナンダよ、なおまた、より突き通し難いものを突き通す者たちが、『これは苦しみである』と如実に洞察し、『これは苦しみの生起である』と如実に洞察し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に洞察し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に洞察するのである。

九　アーナンダよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉突き通すことの比喩

この内容は、要するに矢によって鍵穴を通すよりも、尻尾の先に毛が百本あって、その百本の毛を端から端まで突き通すことがより難しく、それよりも四つの聖なる絶対の真理を体得する方がなおより難しいんだということで、それをサキャ神賢は説いていらっしゃる。よって、ひたすらもうそれに集中するべきであると、サキャ神賢は説いていらっしゃるのである。

なお、この「突き通す」と「洞察する」という言葉は、パーリ語では全く同じpativijjhati という言葉である。

【四六】 第六 暗黒

二 「向煩悩滅尽多学男たちよ、このような大いなる如意と、このような大いなる威神力がある、これら月と太陽の光が分かち合えないところに同一に、暗黒の空間であり、制限がなく、暗黒であり、暗黒の暗がりである中世界がある」と。

三　このように演説されたとき、ある向煩悩滅尽多学男は世尊にこう申し上げた。「尊師よ、それは本当に大きな暗黒です。尊師よ、それは本当に大変大きな暗黒です。尊師よ、いったいこの暗黒よりも、そしてより大きく、そしてよりすさまじい別の暗黒があるでしょうか」と。

「向煩悩滅尽多学男よ、実にこの暗黒よりも、そしてより大きく、そしてよりすさまじい別の暗黒がある」と。

「尊師よ、さて、この暗黒よりも、そしてより大きく、そしてよりすさまじい別の暗黒とは何でしょうか」と。

四「向煩悩滅尽多学男よ、全く、『これは苦しみである』と如実に認識せず理解せず、『これは苦しみの生起である』と如実に認識せず理解せず、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識せず理解せず、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識せず理解しない出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人も、出生に至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだし、老いに至らし

める種々の経験の構成に楽しみを見いだし、死に至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだし、不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだす。

彼らは出生に至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだして、老いに至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだして、死に至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだして、不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだして、同様に出生に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持し、同様に老いに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持し、同様に死に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持し、同様に不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持する。

彼らは同様に出生に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持して、同様に老いに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持して、(同様に死に至らしめる種々

の経験の構成の集積を所持して）、同様に不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持して、同様に出生の暗黒に崩れ落ち、同様に老いの暗黒に崩れ落ち、同様に死の暗黒に崩れ落ち、同様に不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みの暗黒に崩れ落ちる。

彼らは、出生、老い、死、種々の不運な出来事、種々の悲嘆、種々の苦しみ、種々の激痛、種々の悩みから完全に解脱しない。苦しみから完全に解脱しないと、わたしは断言する。

五　向煩悩滅尽多学男よ、そして実に、『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解する出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人も、出生に至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いださず、老いに至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いださず、死に至らしめる種々の経験の構成に楽しみ

を見いださず、不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いださない。

彼らは出生に至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いださず、老いに至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いださず、死に至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いださず、不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いださずに、同様に出生に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持せず、同様に老いに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持せず、同様に死に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持せず、同様に不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持しない。

彼らは同様に出生に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持しないで、同様に老いに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持しないで、同様に死に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持しないで、同様に不運な出来事・悲嘆・苦し

み・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持しないで、同様に出生の暗黒に崩れ落ちず、同様に老いの暗黒に崩れ落ちず、同様に死の暗黒に崩れ落ちず、同様に不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みの暗黒に崩れ落ちない。

彼らは、出生、老い、死、種々の不運な出来事、種々の悲嘆、種々の苦しみ、種々の激痛、種々の悩みから完全に解脱する。苦しみから完全に解脱すると、わたしは断言する。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉離解脱と解脱

ここでのポイントは二つあると考えられる。その第一は、はっきりとここで定義しておかなければならないことだが、それは、vimutti と mutti の違いである。

vimutti というのは離解脱で、これは最終地点、つまり煩悩破壊を意味している。ところが、解脱―― mutti はそうではなくて、例えば人間に生まれ変わらないとか、死から解脱するとか、あるいは老いから解脱するとかというふうに使われる。つまり、解脱は、もうその状態がないということなのである。

◉暗黒

それからもう一つだが、このような苦しみというのは、無明――、つまり暗黒によって生起するんだということを、はっきりとこの経典では述べている。

そして、逆にこのようなものから解放されてくると光が生じて、その暗黒がす

べて解き放され、あるいはその暗黒だった要素が光り輝くことによって、現象として良くなるということが出てくるのである。

◉バルドーと転生

ところで、この「現象として良くなる」とは何か。

ここのところはポイントなので、しっかりと記憶しておいてほしいが、例えば動物界へ生まれ変わるとしよう。そこで、暗い、真っ暗な緑のバルドーで転生する場合は、動物界で悲嘆、苦しみを中心とした動物の生が待っている。ところが、ある程度明るい緑に没入していく場合は、だいたい大金持ちのペットとして飼われて、その生は楽しみが多いということがあるわけである。

同じように、例えば人間として暗いブルーで転生する場合は、その暗いブルーの働きゆえに、例えば殴られるだとか蹴られるとかいじめられるとか、そういう環境に転生する。逆に、光り輝くブルーの場合は、人間の中で、名誉とか地位と

か権力とかを有する形になり、喜びがあるということである。

◉バルドーの色の捨断

こうした色の違いは、功徳とか、寂静とか、いろいろあるわけだが、そういう法則に従っているか従っていないかというのが一つのポイントになる。

そして、そういう色を完全に捨断してしまう道こそが、四つの聖なる絶対の真理なのである。ここでは、それを説いていらっしゃるわけである。

◉中世界

この経典の「中世界」、これがバルドーのことである。一般の魂は、死後だいたい気絶し、バルドーの暗闇があるのである。

ところが、わたしの近くに天界に行った猫がいるわけだが、その猫が死んだとき空間が明るくなった。つまり、天界に行く魂の場合は、空間が明るくなるので

ある。ところが普通は、人間でも暗くなったり、あるいは全く光らなかったりする。つまり、もうこの魂は落ちているということである。

【四七】第七　穴の空間（二）

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、男が大海で一つの穴の空間のあるくびきを中に置いたとしよう。そこで同一に、百の雨季の間ごとが経過してから一度ずつ浮き上がる盲目の亀がいるとしよう。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、これについてどう思うか。そのとき同一に、その盲目の亀が百の雨季の間ごとが経過してから一度ずつ浮き上がり、まさにその一つの穴の空間のあるくびきに首を入れることがあるだろうか」と。

「尊師よ、きっとあるときいつかその条件では、大変長い間が経過してからでしょう」と。

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、実に、その盲目の亀が、百の雨季の間ごとが経

過してから一度ずつ浮き上がり、まさにその一つの穴の空間のあるくびきに首を入れることはより早く、向煩悩滅尽多学男たちよ、しかしながら、一度破滅に至った愚者から人々の状態は早くないと、わたしは断言する。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここでは、法則の実行、寂静の実行、善を行なうこと、功徳を行なうことがなく、向煩悩滅尽多学男たちよ、ここでは、お互いに食べることや弱い者を食べることが続けて行なわれるからである。これはどうしてか。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。

苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきで

ある。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉三悪趣からの脱却の難しさ

人間の状態というものは、愛欲の衝動は残っているけれども、例えば、身体即我であるという考え方、あるいは、真理の実践よりも喜びを求めて遊び回る心や、疑念、あるいは、真理でない教えや、戒とか誓いに対するとらわれ、こういうものがない。そして、その状態で初めて、人間以上に絶えず転生する種子が魂に植えつけられたことになるのである。

しかし、そうではなくて、いったん人間の生が崩れ去った場合どうなるのかというと、当然これらの三つのきずながあるから崩れ去ったわけである。

そうなると、それらにとらわれて結局正しくない教えを賦与されたり、あるい

は、これは動物と地獄が特に多いわけだが、弱肉強食、あるいは大きいものが小さいものを食べるといったような、ただそこには力だけしかない世界へと至る。そうすると、自分もそこで生き続けなければならないから、結局、弱いものを殺生する、弱いものの苦しみがわからない——、これを繰り返し繰り返し行なうことになる。

結局、その経験の構成で次の生が決まるわけだが、ここには、上昇のエネルギーに変えるための実践が全然ない。そうなると、三悪趣に落ちた魂が人間へ転生するのはなかなか難しいと、この経典ではいうのである。

◉四つの修行

ところが、法則の実行、寂静の実行、善を行なうこと、功徳を行なうこと、これらの四つがもしあれば、そこから立ち上げることができる。そこから、人間の世界以上に生まれ変わることができるわけである。(「四つの修行」の詳細は、

（『タターガタ・アビダンマ　第二誦品』参照）

【四八】第八　穴の空間（三）

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、この大いなる大地が一つの水であり、そこで男が一つの穴の空間のあるくびきを中に置くと、すぐに、東の風は西にかき集め、西の風は東にかき集め、北の風は南にかき集め、南の風は北にかき集めるとしよう。そこで、百の雨季の間ごとが経過してから一度ずつ浮き上がる、その盲目の亀がいるとしよう。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、これについてどう思うか。そのとき同一に、その盲目の亀が百の雨季の間ごとが経過してから一度ずつ浮き上がり、まさにその一つの穴の空間のあるくびきに首を入れることがあるだろうか」と。

「尊師よ、その盲目の亀が百の雨季の間ごとが経過してから一度ずつ浮き上がり、まさにその一つの穴の空間のあるくびきに首を入れるということ、これは思いも

らないことです」と。

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、このように、人の状態を得ること、これは思いもよらないことである。向煩悩滅尽多学男たちよ、このように、供養値魂・最上正覚者であられる真理勝者が世界に流転なさること、これは思いもよらないことである。向煩悩滅尽多学男たちよ、このように、真理勝者が説き明かされた法則と修行が世界に顕著になること、これは思いもよらないことである。

五　そして、彼にこの人間の状態が得られ、供養値魂・最上正覚者であられる真理勝者が世界に流転し、真理勝者が説き明かされた法則と修行が世界に顕著になっているのである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉真理勝者の登場

これは、真理勝者が登場なさったとき、よく使われる比喩である。

そして、その盲目の亀とくびきとの関係と同等に、真理勝者がこの世に現われること、そして法則が広まること、これは稀（まれ）である。そこで、その真理勝者がこの世に登場して法則が広まっているわけだから、それを実践できるチャンスに恵まれたあなた方は稀な功徳の持ち主である。よって真理を実践しなさいというのが、この経典の意味である。

比喩についていうならば、『穴の空間（二）』の比喩に、風によってあちこちとくびきがただよう比喩を付け加えることで、稀な真理勝者の登場を表わしているといえる。

【四九】第九　完全無欠山（一）

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、男が山の王・完全無欠山に対して、

七つの緑豆ぐらいの小石を近くに置いたとしよう。
三　向煩悩滅尽多学男たちよ、これについてどう思うか。置かれた七つの緑豆ぐらいの小石と、山の王・完全無欠山とでは、いったいどちらがより多いだろうか」と。
「尊師よ、まさにそのより多いのは、すなわち山の王・完全無欠山であって、わずかなのは、近くに置かれた七つの緑豆ぐらいの小石です。近くに置かれた七つの緑豆ぐらいの小石は、山の王・完全無欠山と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らないのです」と。
四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、聖なる多学の弟子で、見解を獲得した魂が徹底的に明察された状態で、まさにこのより多くの苦しみは、すなわち、完全に破壊され、消費されている。わずかで残されているものは、以前の完全に破壊され、消費された苦しみの集積、すなわち、最高七回流転と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至ら

ない。
そして、彼は『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解するのである。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉向煩悩滅尽多学男に生まれること

この比喩は、まず向煩悩滅尽多学男に生まれることが、いかに稀であるかを説いている。

つまり、一般の魂は、完全無欠山ほどの煩悩を有している。しかし、向煩悩滅尽多学男は、わずかに七粒の緑豆ぐらいの煩悩というか、カルマしか持っていない。そこで、そこまでの状態に来ているということは、前生、あるいは過去において、それだけ修行したということでもあるわけだが、そこまでしか存在していないわけだから、あとはその七粒の緑豆のカルマを早く止滅するために、四つの聖なる絶対の真理を実践しなさいというのが、この経典の意味合いである。

◉最高七回流転

最高七回流転というのは、真理においては最もベースの段階である。そして、ここでは三段比喩が使われている。

つまり、まず完全無欠山という凡夫の状態があって、次に真理に入った最高七回流転の緑豆の状態があって、そしてそこからまた修行して、見解を具足した向煩悩滅尽多学男の状態があるというのである。

◉見解を獲得した魂

この「見解を獲得した」というのは、苦しみの滅尽に至る方法の実践に入っているということである。ここでの見解というのは正見解のことだが、正見解を具足していれば、当然正サマディまでも行くわけである。

つまり、見解を獲得した魂とは、もう今生で解脱できる、――つまり七粒目の緑豆かもしれないということであり、とにかく最高七回流転よりも、もっとカルマの少ない状態なのである。

だから、自分自身がその最終の段階に入っているわけだから、それをもっと自覚して、全力で四つの聖なる絶対の真理を実践しろというのが、この経典の意味合いである。

【五〇】第十　完全無欠山（二）

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、山の王・完全無欠山が、七つの緑豆

ぐらいの小石を除いて、完全に破壊し、続けて消費したとしよう。
三　向煩悩滅尽多学男たちよ、これについてどう思うか。山の王・完全無欠山の完全に破壊され、消費されたもの、あるいは残った七つの緑豆ぐらいの小石では、いったいどちらがより多いだろうか」と。
「尊師よ、まさにそのより多いのは、すなわち、山の王・完全無欠山の完全に破壊され、消費されたものであり、わずかなのは、残った七つの緑豆ぐらいの小石です。残った七つの緑豆ぐらいの小石は、山の王・完全無欠山の完全に破壊され、消費されたものと比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らないのです」と。
四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、聖なる多学の弟子で、見解を獲得した魂が徹底的に明察された状態で、まさにこのより多くの苦しみは、すなわち、完全に破壊され、消費されている。わずかで残されているものは、以前の完全に破壊され、消費された苦しみの集積、すなわち、最高七回流転と比べると、同様

に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らない。

そして、彼は『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解するのである。

五 向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉止滅したカルマの量

これは、今までのカルマの止滅の量を説いた経典である。

前経とは異なり、ここでは、その完全無欠山の消費された量と、緑豆七つとの比較——、つまり、今まで止滅したカルマと、それから残っているカルマとはどうであるかということが説かれている。そして、見解を具足した向煩悩滅尽多学男は、それよりもさらに少ないと言っているのである。

だから、「もうカルマはほとんどないんだ。後はもう一歩なんだから、全力でやれ」という、これは激励の詩なのである。

◉深遠な経典の比喩

わたしは以前から、「経典は完全な形で読むべきである。つまり、同じ内容が説かれているから、これは何とかと表現形態が同じだというとらえ方は間違っている」と言っている。

つまり、その比喩の中に深遠な意味が隠されているわけだから、その比喩の中に隠されている深遠な意味を取るためには、経典をまともに一経一経読むしかな

いんだというのがわたしの見解である。だから、「比喩を削るな」と、わたしがよく言うのはそういうことなのである。

第六章

明察品

【五一】第一　爪の先

二　直ちに、世尊はかすかな泥を爪の先の上に置き、向煩悩滅尽多学男たちに呼びかけられた。
「向煩悩滅尽多学男たちよ、これについてどう思うか。わたしによって爪の先の上に置かれた、このかすかな泥、あるいはこの大いなる大地では、いったいどちらがより多いだろうか」と。
「尊師よ、まさにそのより多いのは、すなわち大いなる大地であって、わずかなのは、世尊によって爪の先の上に置かれたかすかな泥です。世尊によって爪の先の上に置かれたかすかな泥は、大いなる大地と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らないのです」と。
三「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、聖なる多学の弟子で、見解を獲得した魂が徹底的に明察された状態で、まさにこのより多くの苦しみは、すなわち、完全に破壊され、消費されている。わずかで残されているものは、以前の完全に

破壊され、消費された苦しみの集積、すなわち、最高七回流転と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らない。

そして、彼は『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解するのである。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉爪の先の土ぐらいの煩悩

これは、先程の『完全無欠山』の比喩と同じである。

要するにこれは、「爪の先の土と大地とではどちらが多いか。それと同じように、あなた方は、もう爪の先の土ぐらいの煩悩しかないわけだから、それに対して四つの聖なる絶対の真理を実践しなさい。励め！」という内容である。

【五二】第二　蓮池

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、全長五十ヨージャナ（長さの単位）、幅五十ヨージャナ、高さ五十ヨージャナの蓮池があり、いっぱいで、水が岸と同じ高さであり、カラスが飲める。これから男がクサ草の先端で水を引き上げたとしよう。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、これについてどう思うか。クサ草の先端で引き上げられた水、あるいは蓮池における水では、いったいどちらがより多いだろうか」

と。

「尊師よ、まさにそのより多いのは、すなわち蓮池における水であって、わずかなのは、クサ草の先端で引き上げられた水です。クサ草の先端で引き上げられた水は、蓮池における水と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らないのです」と。

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、聖なる多学の弟子で、見解を獲得した魂が徹底的に明察された状態で、まさにこのより多くの苦しみは、すなわち、完全に破壊され、消費されている。わずかで残されているものは、以前の完全に破壊され、消費された苦しみの集積、すなわち、最高七回流転と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らない。

そして、彼は『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に

認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解するのである。
五　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉激励の経

この経典のポイントというよりも、今までの経典のポイントは、要するに、凡夫と真理を実践している人の違いではなくて、真理を実践している最高七回流転と、それからもう最終の完全煩悩破壊する魂との比較の経典である。
そして、ここではそれを、蓮池とクサ草の先端でくみ上げられた水の違いで表現している。つまり、本当に煩悩がゼロといってもいいくらいの状態に来て、最

後の生として頑張れという激励の経なのである。

【五三】 第三 一体になった（一）

二 「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、これらの大きな河、つまり、ガンガー（大変速い河）、ヤムナー（双子の河）、アチラヴァティー（すぐ必要とされる河）、サラブー（湖に似た存在）、マヒー（大いなる大地の河）が混合し集まる所で、これから男が二あるいは三の水の滴を引き上げたとしよう。

三 向煩悩滅尽多学男たちよ、これについてどう思うか。二あるいは三の引き上げられた水の滴、あるいは一体になった水では、いったいどちらがより多いだろうか」と。

「尊師よ、まさにそのより多いのは、すなわち一体になった水であって、わずかなのは、二あるいは三の引き上げられた水です。二あるいは三の引き上げられた水は、一体になった水と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同

様に全体の中のほんの一部の断片に至らないのです。」

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、聖なる多学の弟子で、見解を獲得した魂が徹底的に明察された状態で、まさにこのより多くの苦しみは、すなわち、完全に破壊され、消費されている。わずかで残されているものは、以前の完全に破壊され、消費された苦しみの集積、すなわち、最高七回流転と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らない。

そして、彼は『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解するのである。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽

すべきである」と。

である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心

◉真理勝者の救済計画

ここで、一つ大変重要な法則を説かなければならない。

それは、真理勝者が本当に世に現われるとき、例えば、今から七十億年、八十億年後に現われるマイトレーヤのときもそうだが、つまり、弟子たちが最高七回流転から立ち上がって、最後の生として転生しているのである。そういう状態でなければ、真理勝者は本当の形では現われないのである。

では、真理勝者は途中の形ではどうやって現われるのか。それは、その弟子たちをまず真理に入れ、法則に従わせ、そして最高七回流転まで持っていく。その段階では、グルとして登場する。そして、その縁のある魂を集中しておいて、最後の生、真理勝者として登場するのである。

◉サキャ神賢の救済

そして、サキャ神賢と縁の深い魂は、今から二千五百年前に集中したのである。また、サキャ神賢が弟子たちを教化している段階というのは、『輪廻転生談』などに見られる。

【五四】 第四 一体になった（二）

二 「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、これらの大きな河、つまり、ガンガー、ヤムナー、アチラヴァティー、サラブー、マヒーが混合し集まる所で、その水が二あるいは三の水の滴を除いて、完全に破壊し、続けて消費したとしよう。

三 向煩悩滅尽多学男たちよ、これについてどう思うか。完全に破壊され、消費され一体になった水、あるいは残されている水の滴では、いったいどちらがより多いだろうか」と。

「尊師よ、まさにそのより多いのは、すなわち、完全に破壊され、消費された、

一体になった水であり、わずかなのは、残されている二あるいは三の水の滴です。残されている二あるいは三の水の滴は、完全に破壊され、消費され、一体になった水と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らないのです」と。

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、聖なる多学の弟子で、見解を獲得した魂が徹底的に明察された状態で、まさにこのより多くの苦しみは、すなわち、完全に破壊され、消費されている。わずかで残されているものは、以前の完全に破壊され、消費された苦しみの集積、すなわち、最高七回流転と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らない。

そして、彼は『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解す

るのである。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉煩悩破壊の進度

この経典は、またちょっと変わった角度から説明を加えたい。

最高七回流転から最後の向煩悩滅尽多学男、そして供養値魂になる段階までの煩悩破壊の量というのは、数滴の水と、それから五つの川を合流させたぐらいの水の量の違いがあるんだということを、この経典では説いているのである。つまり、その最高七回流転のときは、もうすでに煩悩破壊が起きているのである。

では、なぜ起きるのか。それは、その前にまず信を持たせて、それから法則に

従わせているから起きているのである。

しかし、煩悩破壊が起きていても、いきなり供養値魂になるわけではなくて、その煩悩破壊がどんどん進んできて、そしてその全部が終わった段階で供養値魂になるのである。

【五五】第五　大地（一）

二 「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、男が大いなる大地に、七つのナツメの実の果実の堅い種ぐらいの小さい玉を近くに置いたとしよう。

三 向煩悩滅尽多学男たちよ、これについてどう思うか。近くに置かれた七つのナツメの実の果実の堅い種ぐらいの小さい玉、あるいはこの大いなる大地では、いったいどちらがより多いだろうか」と。

「尊師よ、まさにそのより多いのは、すなわち大いなる大地であって、わずかなのは、近くに置かれた七つのナツメの実の果実の堅い種ぐらいの小さい玉です。

近くに置かれた七つのナツメの実の果実の堅い種ぐらいの小さい玉は、大いなる大地と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らないのです」と。

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、聖なる多学の弟子で、見解を獲得した魂が徹底的に明察された状態で、まさにこのより多くの苦しみは、すなわち、完全に破壊され、消費されている。わずかで残されているものは、以前の完全に破壊され、消費された苦しみの集積、すなわち、最高七回流転と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らない。

そして、彼は『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解するのである。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【五六】第六　大地（二）

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、大いなる大地が、七つのナツメの実の果実の堅い種ぐらいの小さい玉を除いて、完全に破壊し、続けて消費したとしよう。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、これについてどう思うか。大いなる大地の完全に破壊され、消費されたもの、あるいは残されている七つのナツメの実の果実の堅い種ぐらいの小さい玉では、いったいどちらがより多いだろうか」と。

「尊師よ、まさにそのより多いのは、すなわち、大いなる大地の完全に破壊され、

消費されたものであり、わずかなのは、残されている七つのナツメの実の果実の堅い種ぐらいの小さい玉です。残されている七つのナツメの実の果実の堅い種ぐらいの小さい玉は、大いなる大地の完全に破壊され、消費されたものと比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らないのです」と。

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、聖なる多学の弟子で、見解を獲得した魂が徹底的に明察された状態で、まさにこのより多くの苦しみは、すなわち、完全に破壊され、消費されている。わずかで残されているものは、以前の完全に破壊され、消費された苦しみの集積、すなわち、最高七回流転と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らない。

そして、彼は『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に

認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解するのである。
五　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【五七】第七　海（一）

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、男が大海で二あるいは三の水の滴を引き上げたとしよう。
三　向煩悩滅尽多学男たちよ、これについてどう思うか。二あるいは三の引き上げられた水の滴、あるいは大海における水では、いったいどちらがより多いだろうか。」

「尊師よ、まさにそのより多いのは、すなわち大海における水であって、わずかなのは、二あるいは三の引き上げられた水の滴です。二あるいは三の引き上げられた水の滴は、大海における水と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らないのです」と。

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、聖なる多学の弟子で、見解を獲得した魂が徹底的に明察された状態で、まさにこのより多くの苦しみは、すなわち、完全に破壊され、消費されている。わずかで残されているものは、以前の完全に破壊され、消費された苦しみの集積、すなわち、最高七回流転と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らない。

そして、彼は『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解す

るのである。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【五八】第八　海（二）

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、大海における水が、二あるいは三の水の滴を除いて、完全に破壊し、続けて消費したとしよう。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、これについてどう思うか。完全に破壊され、消費された大海における水、あるいは残されている二あるいは三の水の滴では、いったいどちらがより多いだろうか」と。

「尊師よ、まさにそのより多いのは、すなわち、完全に破壊され、消費された大

海における水であり、わずかなのは、残されている二あるいは三の水の滴です。残されている二あるいは三の水の滴は、完全に破壊され、消費された大海にある水と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らないのです」と。

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、聖なる多学の弟子で、見解を獲得した魂が徹底的に明察された状態で、まさにこのより多くの苦しみは、すなわち、完全に破壊され、消費されている。わずかで残されているものは、以前の完全に破壊され、消費された苦しみの集積、すなわち、最高七回流転と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らない。

そして、彼は『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解す

るのである。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【五九】第九　山のたとえ話（一）

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、男が山の王・雪山に対して、七つのカラシの種子ぐらいの小石を近くに置いたとしよう。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、これについてどう思うか。近くに置かれた七つのカラシの種子ぐらいの小石、あるいはこの山の王・雪山では、いったいどちらがより多いだろうか」と。

「尊師よ、まさにそのより多いのは、すなわち山の王・雪山であって、わずかな

のは、近くに置かれた七つのカラシの種子ぐらいの小石です。近くに置かれた七つのカラシの種子ぐらいの小石は、山の王・雪山と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らないのです」と。
四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、聖なる多学の弟子で、見解を獲得した魂が徹底的に明察された状態で、まさにこのより多くの苦しみは、すなわち、完全に破壊され、消費されている。わずかで残されているものは、以前の完全に破壊され、消費された苦しみの集積、すなわち、最高七回流転と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らない。

そして、彼は『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解するのである。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【六〇】第十　山のたとえ話（二）

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、山の王・雪山が、七つのカラシの種子ぐらいの小石を除いて、完全に破壊し、続けて消費したとしよう。
三　向煩悩滅尽多学男たちよ、これについてどう思うか。山の王・雪山の完全に破壊され、消費されたもの、あるいは残されている七つのカラシの種子ぐらいの小石では、いったいどちらがより多いだろうか」と。
「尊師よ、まさにそのより多いのは、すなわち、山の王・雪山の完全に破壊され、消費されたものであり、わずかなのは、残されている七つのカラシの種子ぐらい

の小石です。残されている七つのカラシの種子ぐらいの小石は、山の王・雪山の完全に破壊され、消費されたものと比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らないのです」と。

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、聖なる多学の弟子で、見解を獲得した魂が徹底的に明察された状態で、まさにこのより多くの苦しみは、すなわち、完全に破壊され、消費されている。わずかで残されているものは、以前の完全に破壊され、消費された苦しみの集積、すなわち、最高七回流転と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らない。

そして、彼は『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解するのである。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉セットになった経典の意義

ここでまた違った角度で説明したいと思うが、これらの経典は二つがセットになっている。

まず第一は、過去の煩悩イコール苦しみの量と、今の煩悩イコール苦しみの量との比較である。そして、第二の経典は、同じ比喩でも、過去に煩悩破壊した煩悩の量と、今から煩悩破壊しなければならない煩悩の量の比較ということになる。

だから、この二つの経典はすごく似ているようだが、サキャ神賢が狙っていらっしゃる部分は違うのである。

第七章

車輪復誦品

【六二】第一　他の

二　直ちに、世尊はかすかな泥を爪の先の上に置き、向煩悩滅尽多学男たちに呼びかけられた。

三「向煩悩滅尽多学男たちよ、これについてどう思うか。わたしによって爪の先の上に置かれた、このかすかな泥、あるいはこの大いなる大地では、いったいどちらがより多いだろうか」と。

「尊師よ、まさにそのより多いのは、すなわち大いなる大地であって、わずかなのは、世尊によって爪の先の上に置かれたかすかな泥です。世尊によって爪の先の上に置かれた、そのかすかな泥は、大いなる大地と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らないのです」と。

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、人々として新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体はわずかだが、なおまた、人々から他の新しい生存に生まれ

変わるこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉他の生存

ここでのポイントは、人間と他の生存についての比較である。

そして、この他の生存が低いとか高いとかは言っていないわけだが、この比喩

からいくと、低い生存に生まれ変わるということを暗に述べているると見るべきである。つまり、これは人間と三悪趣の比較ととらえていいであろう。

◉実感

「四つの聖なる絶対の真理を実感しなかった」というのは、つまり、例えば苦しみを苦しみと思わないがために、そこでのきずなができ、それによって輪廻転生が決定するということを説いているのである。

ここで、〝実感〟という言葉を使っているのは、つまり、下位に結びつける三つのきずなを捨断するためには、実感しなければならないからである。例えば、苦しみを苦しみと思わなければ、それを修習するわけで、修習したら当然そこにきずなができるわけである。

【六二】第二　国境

二　直ちに、世尊はかすかな泥を爪の先の上に置き、向煩悩滅尽多学男たちに呼びかけられた。

三「向煩悩滅尽多学男たちよ、これについてどう思うか。わたしによって爪の先の上に置かれた、このかすかな泥、あるいはこの大いなる大地では、いったいどちらがより多いだろうか」と。

「尊師よ、まさにそのより多いのは、すなわち大いなる大地であって、わずかなのは、世尊によって爪の先の上に置かれたかすかな泥です。世尊によって爪の先の上に置かれたかすかな泥は、大いなる大地と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らないのです」と。

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、種々の大陸の中央で新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体はわずかだが、なおまた、種々の大陸の国境における識別することのできない者である未開人たちの中で、新しい生存に生まれ変わ

る、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉**国境**

これは単純に「国境」というタイトルになっているが、実際には地球全体をとらえた場合、文化エリアと非文化エリアの分類と取ることができる。だから、未

開人——つまり例えば動物を殺して食べるとか、あるいは魚を捕って食べるとか、そういう魂のことをここでは国境の人々、未開人と言っていらっしゃるんだということを理解すべきである。

そして、ここで注意しなければならないのは、あくまでも文明ではなく、文化だということである。つまり、「大陸の中央」とは、やはりジャンブ州、インド中心と考えていい。また、オウム真理教が登場してから、今の日本もそういう意味でいったら文化エリアに入ってきているのである。

【六三】第三　智慧

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、さて全く同様に、聖なる智慧の眼を賦与されたそれらの生命体はわずかだが、なおまた、非神秘力に至って理性を失っているこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった

本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉智慧

ここでは、四つの聖なる絶対の真理を実感しない限り、智慧は生じない、非神秘力は取り払われないということをいっている。

やはり、この四つの聖なる絶対の真理のポイントは寂静なのである。心が静まる。平静に現象を見つめる。そして、何をなせばメリットになるか、何をなせば

ディフェクト、欠点になるかということを繰り返し繰り返し実践することによって、最終地点に到達する。そして、その途中の段階で智慧が生じるのである。一方は、それを実践しないがために、智慧は生じないで結局は非神秘力に没入したままであるということが、この経典の内容である。

【六四】第四　蒸留酒であるアルコール

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、蒸留酒であるアルコールで酔わせて怠惰にする道理を自制しているそれらの生命体はわずかだが、なおまた、蒸留酒であるアルコールで酔わせて怠惰にする道理を自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真

理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。
六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉アルコール

四つの聖なる絶対の真理を実感する。実感するということは、例えば、アルコールの体に対する働きを理解し、それは苦しみであるという道理を理解することである。そして、そのように実感する魂がすごく少なくて、理解していない魂が多いということを、この経典では言っているのである。

【六五】第五　水

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、乾いた土地から生じるそれらの生命体はわずかだが、なおまた、水から生じるこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉大海

まず、真理における宇宙観を理解しなければならない。その真理における宇宙観では、まず外側から、大海があって、そして大陸があって、大海があって、山があって、湖があって、山があって、湖があって、これが繰り返されるのである。

そこで当然、その中央に行けば行くほど徳の高い魂が集中していると見るべきであって、そうなると結局、その大海の生存より陸地での生存の方が徳が高いことになる。そして、この大海というのは、悪業の集積の群が形成されているのである。

【六六】第六 母に対する慈愛のある

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、母に対する慈愛のあるそれらの経(生命体)はわずかだが、なおまた、母に対する慈愛のないこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【六七】第七　父に対する慈愛のある

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、父に対する慈愛のあるそれらの生命体はわずかだが、なおまた、父に対する慈愛のない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉慈愛

ここで一つ気をつけなければならないのは、〝慈愛〟という言葉である。これは、〝愛情〟と違う意味で使われている。

慈愛とは、例えば見返りを求めない心の働きであり、愛情とは、自分の欲求を

満たすために対象の存在を肯定する心の働きである。よって、この真理でいう慈愛というのは、相手を真理の流れに入れるということが絶対条件に入ってくるのである。

【六八】第八　出家修行者に対する尊敬があること

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、出家修行者に対する尊敬があるそれらの生命体はわずかだが、なおまた、出家修行者に対する尊敬がない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきで

ある。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【六九】第九　祭司に対する尊敬があること

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、祭司に対する尊敬があるそれらの生命体はわずかだが、なおまた、祭司に対する尊敬がないこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきで

ある。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽であると専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉**尊敬**

これは、出家修行者や祭司に対して尊敬があること、イコール煩悩破壊、苦しみ、苦しみの生起、苦しみの滅尽、苦しみの滅尽に至る方法に対する尊敬ということになる。

尊敬は、次にベクトルの矢印としては実践へと移行するから、当然四つの聖なる絶対の真理を実感していないとそうならないということを言っているわけである。

【七〇】第十　敬意を払う

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、一族の徳の高い者に敬意を払うそれらの生命体はわずかだが、なおまた、一族の徳の高い者に敬意を払わないこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉敬意を払う

ここの「徳の高い」という意味は、例えば真理を実践している魂、これは最も徳が高いわけで、それに対して敬意を払うということは自分自身も真理の流れに入ることを表わしている。

あるいは、現実的にも徳が現象化して、地位とか名誉とか、自然とそういうものを具足した魂に対しては、やっぱり同じことが言えていて、それに敬意を払うことによって、自分自身もそちらの方にベクトルが向かうということになる。

第八章

少なくやめられた品

【七二】第一　生き物

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、殺生を自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、殺生を自制していないこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉殺生

これは要するに、殺生を自制している魂は四つの聖なる絶対の真理を実感している。それによって、輪廻転生を含めてメリットが大きいということを言っているわけである。

例えば、わたしたちが殺生をすると、相手に苦痛を与える。苦痛を与えると、その苦痛のヴァイブレーションは、必ず自分の内側に内在される。そして、苦痛という形で、わたしたちに返ってくるわけである。逆に、生き物を安らがせるならば、その生き物の喜びというものが、わたしたちの心に根付かされるから、これはわたしたちの喜びという形で返ってくるのである。

【七二】第二　与えられないもの

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、与えられないものを強奪することを自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、与えられないものを強奪

することを自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉与えられないものを強奪すること

人の心というものは、必ずその人の所有しているものに対して愛着している。

あるいは、執着している。ということは、他の者の所有を盗むということは、その人に、その執着から来る苦しみを与えることになる。
よって、これは逆に、自分の執着しているものを奪われるという形で苦しまなければならないのである。

【七三】第三　愛欲

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、愛欲における邪悪な行為を自制している それらの生命体は少ないが、なおまた、愛欲における邪悪な行為を自制していないこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。
五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉愛欲における邪悪な行為

邪淫には、正確にいうと二つの意味合いがある。

その第一は、性エネルギーを漏らすことにより、徳の消耗をし、疲弊するということである。そして第二は、仏教的に一般的にいわれている邪淫だが、これは、他人の妻、あるいは他人の夫を寝取るということなのである。

【七四】第四　嘘の言い方

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、嘘の言い方を自制しているそれら

の経（生命体）は少ないが、なおまた、嘘の言い方を自制していないこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉嘘

この嘘というものは、ものを覆い隠したいと考える心の働きが増大される。こ

の心の働きは、わたしたちのカルマの現象化を遅くする。そして、カルマの現象化が遅れると、カルマの理法が理解できなくなり、悪業を多く積む。そして、それによって、結局その悪業が現象化するときは、取り返しのつかないようなカルマの清算をしなければならないことになるのである。

【七五】第五　中傷

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、中傷の言葉を自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、中傷の言葉を自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉中傷

中傷というのは、直接その人に悪口を言うのではなく、その悪口の相手以外の人に、その人の悪口を言い、それによって、その人を陥れようとする心の働きである。当然、これも自分自身に苦しみのカルマが返ってくることになる。

【七六】　第六　乱暴な

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、乱暴な言葉を自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、乱暴な言葉を自制していないこれらの生命体は

より多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉乱暴な言葉

乱暴な言葉、つまり悪口はどうであろうか。これは殺生と同じである。つまり、悪口を放つことにより、相手に苦しみを生起させる。そして、その苦しみのヴァ

イブレーションは、自分の心に返ってくるのである。

【七七】第七　軽薄語

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、軽薄語を自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、軽薄語を自制していない種々の生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心

すべきである」と。

◉軽薄語

軽薄語というものは、心の働き即言葉という、つまりコーザル即アストラルという、この流れを変えてしまう。つまり、心にもない言葉を大量に語ることにより、アストラルに心と関係のない、いらぬものがたくさん生じることになる。ということは、心で思ったことが現象化せず、屈折を生むわけである。

つまり、この軽薄語は、わたしたちがものを達成していく上において最も大きな障害となる。

【七八】第八　種子

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、草木の種子の群を損傷することを自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、草木の種子の群を損傷する

ことを自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。
五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。
六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉草木の殺生

草木の成長を担当しているのは、成長天である。そして、この成長天の担当し

ている部分を阻害するということは、その天界との縁を傷つけることになる。したがって、草木も殺生しない方がいいのである。

【七九】 第九　異なる時間において

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、異なる時間の食べ物を自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、異なる時間の食べ物を自制していないこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽

である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉食事の回数

これは、食べる回数が多いということは、それだけその食に引っかかって、その引っかかりゆえに輪廻転生が繰り返されるという意味があるわけである。

また、一日三食は獣の食事であり、一日二食は人間の食事であり、一日一食は聖者の食事であると仏典にあるが、これはプラーナの消費とも関係がある。

【八〇】第十　香りのある化粧品

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、香りのある花飾りである化粧品を身につけ装飾して飾ることの道理を自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、香りのある花飾りである化粧品を身につけ装飾して飾ることの道理を自

制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉香り

花飾りから発する香りと花というものを自制しないということは、嗅覚(きゅうかく)のとらわれが生じてくる。嗅覚のとらわれが生じるということは、例えば、蜂とか蝶と

いうような魂に転生する可能性が高くなるという意味があるわけである。だから、これは香りの捨断を意味しているのである。

第九章

生の穀物復誦品

【八二】第一　舞踏

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、舞踏・歌・器楽・見せ物を見ることを自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、舞踏・歌・器楽・見せ物を見ることを自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉舞踏・歌・器楽・見せ物

この経典の内容は、要するに記憶修習の怖さを言っているのである。例えば、愛欲の歌を歌えば愛欲的になるし、例えば、舞踏を見れば、その舞踏の記憶修習が次の生へと至る因となる。音楽についても同じであって、音楽に引っ張り込まれる。そのように真理どかけ離れていくという意味で、これを捨断しろと言うのである。

【八二】第二　寝台

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、上等の寝台や大きな寝台を自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、上等の寝台や大きな寝台を自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対し

て、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉寝台

上等の寝台や大きな寝台といった、安楽な寝台にわたしたちが寝るということは、それだけ長く睡眠をとることになる。そして、心に緊張がなくなり、魔が入りやすくなる。だから、捨断しなければならないわけである。

【八三】第三　銀貨

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、金貨・銀貨を受け取ることを自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、金貨・銀貨を受け取ることを自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉金貨や銀貨

これは、第一に、金貨や銀貨のある所に転生すること、つまり人間転生の可能性があるということ、第二に、それにとらわれてしまって貪りが出てくるということで、捨断しなければならないわけである。

◉解脱直前の弟子に説く法

また、これは向煩悩滅尽多学男に説いている法である。つまり、解脱直前の弟子たちに説いている法だから、要するに人間転生の可能性も捨断の対象なのである。真理といっても段階があることに注意すべきである。

【八四】第四　穀物

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、生の穀物を受け取ることを自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、生の穀物を受け取ることを自制し

ていない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。
五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。
六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉生の穀物

先程の「草木の殺生」と同じように、穀物は成長天と関係があって、生の穀物を受けるということは殺生になるし、成長天との縁を傷つけるということなので

ある。

【八五】第五　肉

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、生肉を受け取ることを自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、生肉を受け取ることを自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心

すべきである」と。

◉生肉

生肉を受け取るということは、その前に殺生が行なわれるわけで、当然殺生に加担したことになるから、これも問題となるわけである。

【八六】第六　少女において

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、婦人・少女を受け取ることを自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、婦人・少女を受け取ることを自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真

理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。
六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉婦人や少女を受け取ること

これは、性欲、性エネルギーの漏れと関係があるので、捨断しなければならないのである。

【八七】第七　女の奴隷

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、男女の奴隷を受け取ることを自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、男女の奴隷を受け取ることを自

制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉男女の奴隷

これは、まず徳の消耗につながる。それから、そういう奴隷制度の下に輪廻転生しなければならないカルマを形成してしまうのである。

【八八】 第八　ヤギと羊

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、ヤギと羊を受け取ることを自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、ヤギと羊を受け取ることを自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【八九】第九　鶏と豚

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、鶏と豚を受け取ることを自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、鶏と豚を受け取ることを自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【九〇】第十　象

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、象・牛・雄馬・雌馬を受け取ることを自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、象・牛・雄馬・雌馬を受け取ることを自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉動物を飼うこと

この経典で、ヤギと羊というのは乳を搾るための動物、鶏と豚というのはその肉を食べるための動物、そして象や牛や雄馬や雌馬というのは、運搬等で使われる動物を表わしている。

そして、動物を飼うということは、死後バルドーで、例えばヤギと羊がわーっと出てきたら、そこへ転生してしまう。だから、やってはいけないのである。

普通の教えでは動物をかわいがれというが、転生からいえば、動物に対する慈愛は持っても、興味を示してはいけないのである。

第十章

より多くの生命体品

【九二】第一　田畑

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、田畑と屋敷を受け取ることを自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、田畑と屋敷を受け取ることを自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉田畑と屋敷

田畑と屋敷を受け取るということは、その場所に固定されるわけである。さらに、場所に固定されるだけではなくて、作物を作って食べるとか、そこで生活するということになるから、受け取ってはいけないのである。

【九二】第二　売買

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、売買を自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、売買を自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉売買

売買を修習することになると、結局、低級霊域（ていきゅうれいいき）か人間にしか転生しなくなる。それゆえに戒められるのである。

【九三】　第三　使い

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、使いにやったり行ったり専念することを自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、使いにやったり行ったり専念することを自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。

これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉使い

これは、当然そこで何かに服従する、あるいは服従させるカルマが出てくる。すると、来世人間だけではなくて、例えば猿などの動物に転生する可能性もある

わけである。

【九四】 第四　秤をちょろまかすこと

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、秤（はかり）をちょろまかしたり、銅貨をちょろまかしたり、寸法をちょろまかすことを自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、秤をちょろまかしたり、銅貨をちょろまかしたり、寸法をちょろまかすことを自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきで

ある。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉秤や銅貨や寸法をちょろまかすこと

これは、低級霊域か人間の転生である。

【九五】第五　不正

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、不正・ごまかし・詐欺・不誠実な行為を自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、不正・ごまかし・詐欺・不誠実な行為を自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。

これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった

本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉不正・ごまかし・詐欺・不誠実な行為

これは、動物か低級霊域か人間の転生である。

【九六】第六　傷害

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、傷害を自制しているそれらの生命

体は少ないが、なおまた、傷害を自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。

五　苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【九七】第七　殺害

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、殺害を自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、殺害を自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。

五　苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【九八】第八　縛ること

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、縛ることを自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、縛ることを自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。

五　苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【九九】第九　略奪

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、略奪を自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、略奪を自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。

五　苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【一〇〇】第十　不法横領

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、不法横領を自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、不法横領を自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。

五　苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【一〇二】第十一　暴力行為

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、暴力行為を自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、暴力行為を自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。

五　苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

◉傷害・殺害・縛ること・略奪・不法横領・暴力行為

傷害は、動物、低級霊域、あるいは地獄のカルマも出てくる。殺害は、動物と地獄。略奪は、動物と低級霊域と人間。不法横領は、低級霊域、あと動物と人間も可能性がある。暴力行為は、地獄と動物である。

また、縛ることについては、どんなに高くても支配流転双生児天である。低い場合は、例えば人間の警察等になるわけである。そして、カルマの法則からいったら、逆にそれが返されるわけで、そうなったら今度は動物とか地獄になるわけである。

第十一章

五つの方向品

【一〇二】第一　五つの方向

二　直ちに、世尊はかすかな泥を爪の先の上に置き、向煩悩滅尽多学男たちに呼びかけられた。

三「向煩悩滅尽多学男たちよ、これについてどう思うか。わたしによって爪の先の上に置かれた、このかすかな泥、あるいはこの大いなる大地では、いったいどちらがより多いだろうか」と。

「尊師よ、まさにそのより多いのは、すなわち大いなる大地であって、わずかなのは、世尊によって爪の先の上に置かれたかすかな泥です。世尊によって爪の先の上に置かれたかすかな泥は、大いなる大地と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らないのです」と。

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、人から死んで人々において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、人から死んで激苦地獄において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのであ

る。これはどうしてか。
向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。
五　苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。
六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【一〇三】第二　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、人から死んで人々において新しい生

存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、人から死んで動物としての発生において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一〇四】第三　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、人から死んで人々において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、人から死んで低級霊域において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一〇五】第四　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、人から死んで愛欲神たちの所において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、人から死んで激苦地獄において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多

いのである。

【一〇六】第五　五つの方向

四向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、人から死んで愛欲神たちの所において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、人から死んで動物としての発生において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一〇七】第六　五つの方向

四向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、人から死んで愛欲神たちの所において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、人から死んで低級霊域において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一〇八】第七　五つの方向

四向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、愛欲神の所から死んで愛欲神たちの所において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、愛欲神の所から死んで激苦地獄において新しい生存に生まれ変わる、これらの生命体はより多いのである。

【一〇九】第八　五つの方向

四向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、愛欲神の所から死んで愛欲神たちの所において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、愛欲神の所から死んで動物としての発生において新しい生存に生まれ変わる、これらの生命体はより多いのである。

【一一〇】第九　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、愛欲神たちの所において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、愛欲神の所から死んで低級霊域において新しい生存に生まれ変わる、これらの生命体はより多いのである。

【一一一】第十　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、愛欲神の所から死んで人々において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、愛欲神の所から死んで激苦地獄において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一一二】第十一　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、愛欲神の所から死んで人々において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、愛欲神の所から死んで動物としての発生において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一一三】第十二　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、愛欲神の所から死んで人々において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、愛欲神の所から死んで低級霊域において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一一四】第十三　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、激苦地獄から死んで人々において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、激苦地獄から死んで激苦地獄において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一一五】第十四　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、激苦地獄から死んで人々において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、激苦地獄から死んで動物としての発生において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一一六】第十五　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、激苦地獄から死んで人々において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、激苦地獄から死んで低級霊域において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一一七】第十六　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、激苦地獄から死んで愛欲神たちの所において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、激苦地獄から死んで激苦地獄において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一一八】第十七　五つの方向

四向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、激苦地獄から死んで愛欲神たちの所において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、激苦地獄から死んで動物としての発生において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一一九】第十八　五つの方向

四向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、激苦地獄から死んで愛欲神たちの所において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、激苦地獄から死んで低級霊域において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一二〇】第十九　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、動物としての発生から死んで人々においで新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、動物としての発生から死んで激苦地獄において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一二一】第二十　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、動物としての発生から死んで人々において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、動物としての発生から死んで動物としての発生において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一二二】第二十一　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、動物としての発生から死んで人々においで新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、動物としての発生から死んで低級霊域において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一二三】第二十二　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、動物としての発生から死んで愛欲神たちの所において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、動物としての発生から死んで激苦地獄において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一二四】第二十三　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、動物としての発生から死んで愛欲神たちの所において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、動物としての発生から死んで動物としての発生において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一二五】第二十四　五つの方向

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、動物としての発生から死んで愛欲神たちの所において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、動物としての発生から死んで低級霊域において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一二六】第二十五　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、低級霊域から死んで人々において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、低級霊域から死んで激苦地獄において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一二七】第二十六　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、低級霊域から死んで人々において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、低級霊域から死んで動物としての発生において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一二八】第二十七　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、低級霊域から死んで人々において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、低級霊域から死んで低級霊域において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一二九】第二十八　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、低級霊域から死んで愛欲神たちの所において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、低級霊域から死んで激苦地獄において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一三〇】第二十九　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、低級霊域から死んで愛欲神たちの所において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、低級霊域から死んで動物としての発生において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一三一】第三十　五つの方向

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、低級霊域から死んで愛欲神たちの所において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、低級霊域から死んで低級霊域において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。

五　苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

七　世尊はこれを演説なさった。大喜びしたその向煩悩滅尽多学男たちは、世尊のお説きになったことに喜びを見いだした。

◉五つの方向

これについては、要するに、いかに高い世界に生まれ変わるかが難しいかということを説き示した経典群である。

なお、激苦地獄から死んで激苦地獄に生まれ変わるというのは、例えば、熱地獄から転生して寒冷地獄に生まれ変わるといったことである。

※オウム真理教では、本来の意味を正確に表わしていない既製の仏教用語は用いず、パーリ語原典を忠実に翻訳し、吟味した結果、決定した訳語を使っています。以下に、代表的な言葉の対比表を掲げますので参照してください。また、仏教・ヨーガの言語対比表も参考までに掲載しました。

◆言語対比表

欲界→愛欲界
無間地獄→超期間激苦地獄
叫喚地獄→号叫激苦地獄
鉢特摩地獄→紅蓮華のような状態になる
　激苦地獄
餓鬼→低級霊

阿修羅→不飲酒天
憤怒天→意識堕落天
戯忘天→戯れ堕落天
地居天→地上愛欲神天
四天王衆天→四大王天
　持国天→堅固王国天
　増長天→成長天
　広目天→統治変化自在天空天
　毘沙門天、多聞天→守庶民外傷天
　夜叉→人食い鬼神
忉利天→三十三天
　帝釈天→有能神
夜摩天→支配流転双生児天
　閻魔王→支配流転双生児王
兜率天→除冷淡天

楽変化天、化楽天→創造満足天

他化自在天→為他神以神通創造欲望満足従事天

悪魔→破滅天

色界→形状界

梵天→神聖天

梵衆天→神聖衆愛欲神天

梵輔天→神聖臣天

大梵天→大神聖天

浄天→美天

遍浄天→総美愛欲本質神天

広果天→偉大果報愛欲本質神天

浄居天→清潔居住天

無煩天→超空間愛欲神天

無熱天→超燃焼愛欲神天

善現天→善安楽愛欲神天

善見天→善現象愛欲神天

色究竟天→超越童子愛欲本質神天

無色界→非形状界

空無辺処→空間無辺境

識無辺処→識別無辺境

無所有処→無所有境

非想非非想処→非認知非非認知境

想受滅→認知経験滅尽

須弥山→完全無欠山
東勝身洲→東の高貴なる身体を得る大陸
南贍部洲、閻浮提→南のバラリンゴの大陸
西牛貨洲→西の願いがかなう牛の大陸
北倶盧洲→北の悪しき音の大陸

成劫→再生期
住劫→継続期
壊劫→還元期

釈迦牟尼→サキャ神賢
如来→真理勝者
応供→供養値魂
正等覚→最上正覚者
明行足→智徳成就者

善逝→最上善逝
世間解→世間解（変更なし）
無上士→無上士（変更なし）
調御丈夫→丈夫調御者
天人師→天人師（変更なし）
仏陀→覚者
世尊→世尊（変更なし）

菩薩→到達真智運命魂
比丘→向煩悩滅尽多学男
比丘尼→向煩悩滅尽多学女
優婆塞→帰依信男
優婆夷→帰依信女
僧伽→出家教団
長老→高弟

言語対比表

声聞→多学の弟子
沙門→出家修行者
沙弥→少年出家者
遊行者→托鉢修行者
バラモン→祭司
クシャトリヤ→武人
ヴァイシャ→庶民
シュードラ→奴隷
四双八輩→四対の人々・八つの宗教的特性を持つ人々
預流→真理の流れに入ること
一来→（愛欲界に）一度だけ再生すること
不還→不還（変更なし）

阿羅漢→供養値魂
四預流支→四つの真理の流れに入る段階
四聖諦→四つの聖なる絶対の真理
苦聖諦→苦しみの聖なる絶対の真理
集聖諦→苦しみの生起の聖なる絶対の真理
滅聖諦→苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理
道聖諦→苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理
四念処→四つの記憶修習述

四正断、四正勤→四つの正しい努力

四如意足→四つの如意の基礎
欲如意足→決意如意の基礎
精進如意足→精進如意の基礎
心如意足→思念如意の基礎
観如意足→観慧如意の基礎

五根→五つの潜在性
信根→信の潜在性
精進根→精進の潜在性
念根→記憶修習の潜在性
定根→サマディの潜在性
慧根→智慧の潜在性

五力→五つの能力
信力→信の能力
精進力→精進の能力
念力→記憶修習の能力
定力→サマディの能力
慧力→智慧の能力

七覚支→七つの覚醒段階
念覚支→記憶修習正覚段階
択法覚支→法則の検討正覚段階
精進覚支→精進正覚段階
喜覚支→喜正覚段階
軽安覚支→静寂正覚段階
定覚支→サマディ正覚段階
捨覚支→無頓着正覚段階

八正道→聖なる八段階の道
正見→正見解
正思惟→正思惟（変更なし）
正語→正語（変更なし）
正業→正行為
正命→正生活
正精進→正奮闘
正念→正記憶修習
正定→正サマディ

三苦→三つの苦しみの本質
苦苦→苦しみの苦しみの本質
行苦→悪い経験の構成の苦しみの本質
壊苦→悪化の苦しみの本質

三受→三つの感覚
楽受→楽の感覚
苦受→苦しみの感覚
不苦不楽受→不苦不楽の感覚

四無量心
慈→聖慈愛
悲→聖哀れみ
喜→聖称賛
捨→聖無頓着

五取蘊→五つのとらわれの集積
色取蘊→形状-容姿のとらわれの集積
受取蘊→感覚のとらわれの集積
想取蘊→表象のとらわれの集積

行取蘊→経験の構成のとらわれの集積
識取蘊→識別のとらわれの集積

五蓋→五つの障害
貪欲蓋→愛欲の衝動による障害
瞋恚蓋→害心による障害
惛眠蓋→頑固と愚鈍による障害
掉悔蓋→興奮と後悔による障害
疑蓋→疑念による障害

五妙欲→五つの愛欲の構成部分
色→形状-容姿
声→声
香→香り
味→味
触→接触

五下分結→五つの下位に結びつけるきずな
有身見→有身謬見
疑→疑念
戒禁取→戒誓のとらわれ
貪欲→愛欲の衝動
瞋恚→害心

五上分結→五つの上位に結びつけるきずな
色貪→形状愛著
無色貪→非形状愛著
慢→慢（変更なし）
掉挙→興奮
無明→非神秘力

八解脱→八つの離解脱
八勝処→八つの克服境
十遍処→十全境
十波羅蜜→十の徹底

十二縁起の法→十二の条件生起の段階
無明→非神秘力
行→経験の構成
識→識別
名色→心の要素-形状-容姿
六処→六つの感覚要素と対象
触→接触
受→感覚
愛→渇愛
取→とらわれ

有→生存
生→出生
苦→苦しみ
信→信（変更なし）
悦→歓喜
喜→喜（変更なし）
軽安→静寂
楽→楽（変更なし）
三昧→サマディ
如実知見→如実精通見解
遠離→現世否定
離貪→離愛著
解脱→離解脱

涅槃→煩悩破壊
般涅槃→完全煩悩破壊
中般涅槃→中完全煩悩破壊
生般涅槃→減少完全煩悩破壊
無行般涅槃→形状界にて経験の構成がなく功徳の果報を受けつつある完全煩悩破壊
有行般涅槃→形状界にて経験の構成があり真理の実践による完全煩悩破壊
一種者→一つの種子を持つ者
家家者→徳の高い家から家へと転生する者
極七返→最高七回流転者

正智→正精通
正解脱→正離解脱
心解脱→心の離解脱
慧解脱→智慧の離解脱

殺生→殺生（変更なし）
偸盗→与えられないものを強奪すること
邪淫→愛欲における邪悪な行為
妄語→嘘の言い方
綺語→軽薄語
悪口→乱暴な言葉
両舌→中傷の言葉
貪→愛著
瞋→邪悪心
癡→迷妄

愁→不運な出来事
悲→悲嘆
苦→苦しみ
憂→激痛
悩→悩み

五趣→五つの方向
善趣→幸福に向かうこと
悪趣→悲痛に向かうこと

カルマ→要素の蓄積
法→法則
梵行→神聖行
布薩→戒誓行
波羅提木叉→約束維持解放

頭陀→断修行障礙
袈裟衣→赤っぽい黄色の衣
衆生→生命体
四大種→四大元素
本生経→輪廻転生談

◆仏教・ヨーガ　言語対比表

愛欲界―現象界
形状界―アストラル世界
非形状界―コーザル世界
愛著―サットヴァ
邪悪心―ラジャス
迷妄―タマス

索引



あなたに絶対の幸福を約束する

――オウム真理教

心身の悩みを解決したい
超健康体を得たい
豊かな生活を送りたい
素晴らしい人間関係を築きたい
スーパー・パワーを身につけたい
来世も幸福に生きたい
解脱し、永遠の至福を得たい

最高の教義、最高の奥儀、そして麻原尊師のもと、すべては確実に実現します。

●オウム真理教が誇る三つの基本的修行体系

1、マハーヤーナ

現実生活をより豊かにし、幸福な人生をお約束します。ご年輩の方、仕事が忙しく時間のあまり取れない方にお勧めです。

2、タントラ・ヴァジラヤーナ

行法、イニシエーションを中心として進め、霊性を向上させて、神秘世界を実体験することができます。この修行体系を選択すれば今生で解脱し、悟ることも夢ではありません。

3、テーラヴァーダ

原始仏教の上座部仏教を再現しました。真理にのっとって清浄な日常生活を送ることによって、幸せな来世が約束されます。また、経典の記憶修習によって心の成熟が促され、悟りを得ることが可能です。オウム真理教の深遠な教義を徹底的に学びたい方に最適です。

※資料請求券を貼付けしたハガキ、または電話にて最寄りの本・支部までご連絡ください。入信案内等、詳しい資料をお送りします。

キリトリ線

タターガタ・アビダンマ
第四誦品
資料請求券

仏教の再現

修行体系

典』翻訳の成果がここに！

実践可能な在家での正しい修行。
実現する在家での解脱と悟り。
麻原尊師の説かれる深遠な法則と
賢直説根本経典』を学び、
指す方に最適の修行体系です。



正統派上座部

テーラヴァーダ

『サキャ神賢直説根本経

わかりやすい法則と経典があるからこそ、
正確な法則と経典があるからこそ、
テーラヴァーダ修行体系は
完璧に翻訳された『サキャ神
心の成熟・智慧の向上を目

テーラヴァーダの智慧の真髄

『仏典研究』



(定価3000円)

麻原彰晃尊師説法、『サキャ神賢直説根本経典』、高弟の成就体験談と盛りだくさんで、オウム真理教の教義が満載。仏典ファン、真理の探究者には見逃せない中味の濃い月刊誌です。

テーラヴァーダ修行体系を選択された方に、毎月お届けいたします。

この本をお読みになって、どのような感想をお持ちになりましたか。あなたのご意見を、ぜひ下記の「『タターガタ・アビダンマ 第四誦品』読者係」までお送りください。

〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17
オウム出版「『タターガタ・アビダンマ 第四誦品』読者係」

◆各道場のご案内◆

富士山総本部 0544(54)1267
〒418-01 静岡県富士宮市人穴381-1
東京本部 03(3327)8565
〒156 東京都世田谷区赤堤2-42-5 杉田村松ビル1F
新東京本部 03(3396)9393
〒167 東京都杉並区下井草4-4-4 井口ビル2F
大阪支部 06(397)1022
〒532 大阪府大阪市淀川区西宮原1-8-14 八光ビル2F
福岡支部 092(474)2877
〒812 福岡県福岡市博多区博多駅前2-6-15 第一渡部ビル6F
名古屋支部 052(252)0709
〒460 愛知県名古屋市中区栄5-8-14 万国ビル3F
札幌支部 011(241)4938
〒060 北海道札幌市中央区北2条西2丁目19-1 チサンホテル本館2F
京都支部 075(371)3759
〒600 京都府京都市下京区堀川通り松原上ル五軒町384 松本ビル2F
仙台支部 022(268)3904
〒982 宮城県仙台市若林区河原町1-4-20 十全会ビル2F
金沢支部 0762(51)8457
〒920 石川県金沢市京町25-20 ソフトオフィスビル2+4 2F
高知支部 0888(84)8286
〒780 高知県高知市はりまや町2-8-8 安藤ビル2F
広島支部 082(264)6250
〒732 広島県広島市南区西蟹屋4-4-18 和田ビル3F
横浜支部 045(243)8079
〒231 神奈川県横浜市中区若葉町3-41-2 コスモ伊勢佐木長者町ビル204
和歌山支部 0734(24)2859
〒640 和歌山県和歌山市駿河町42 和歌山酒販会館2F
水戸支部 0292(26)8044
〒310 茨城県水戸市中央2-2-1 HDビル6F
船橋支部 0474(66)4965
〒274 千葉県船橋市新高根6-26-18
那覇支部 098(869)7707
〒902 沖縄県那覇市安里2-4-12 嘉数グラビアハイツ5F
堺支部 0722(21)1843
〒590 大阪府堺市海山町4-168-9
高崎支部 0273(46)1573
〒370-12 群馬県高崎市倉賀野町 下稲荷前1081-5
福井支部 0776 (26) 6145
〒910 福井県福井市御幸3-3-41 東伸ビル2F
松本支部 0263(28)7429
〒399 長野県松本市芳川野溝527-3
深谷出張所 0485(74)6205
〒366 埼玉県深谷市萱場441-8
渋谷出張所 03(3476)5065
〒150 東京都渋谷区道玄坂1-15-3 プリメーラ道玄坂317号

〈海外支部〉
ニューヨーク支部 212(421)3687
8 East 48th St. #2E (2nd Floor), New York, N.Y. 10017 U.S.A.
ボン支部 (0228)616647
Auf dem Hügel 48, Endenich, 5300 Bonn 1, S.R.Germany
スリランカ支部
(AUM SACCA SAṄGHA ASSOCIATION)
Horahena, Watte, Angulugaha, Galle, Sri Lanka
モスクワ支部 095-451-62-41
Kindergarten No.468 ul. Dybenko, 6A, Moscow, 125475, Russia

タターガタ・アビダンマ　第四誦品

一九九二年十一月二十日　初版発行

定　価　二〇〇〇円

著　者　真理の御魂（みたま）　最聖　麻原彰晃尊師

発行者　松本知子
　　　　石井久子

発行所　株式会社オウム

東京都世田谷区世田谷二ー八ー一七

郵便番号　一五四

電　話　〇三（三四三九）六〇四三

振　替　東京二ー一〇九三二五

ISBN4-87142-061-2　C0014　P2000E

タターガタ・アビダンマ

Tathāgata Abhidhamma

第四講品

ISBN4-87142-061-2 C0014 P2000E 定価2000円(本体1942円)